

SUSAP 2019 SPRING
東華大学プログラム
成果報告書
2019. 2. 17～2019. 3. 16



参加者プロフィール



相浦 章吾（団長）
医学部医学科 1 年

春休みを利用して英語のスピーキング・リスニングの力を鍛えたいという理由でプログラムへの参加を決めた。また、海外経験が無かったため、日本を出て異文化に触れ、狭い視野を広くしたいというのも参加の理由の一つである。



中山 聡（副団長）
教育学部中等教育主免
英語科 1 年

自分の英語力を試したい、英語でコミュニケーションをとりたい、英語だけの授業を受けたい、海外に行きたい、外国の友達を作りたい等、理由は沢山あるが、とにかく外国に行って経験を積みたいという思いから参加を志望した。



矢野 裕子（副団長）
教育学部幼小連携教育コース
特別支援教育専攻 1 年

自分の英語力がどのくらい海外で通用するか身をもって体験したかったため参加を希望した。また、世界各国から留学生が集まるとの事だったので様々な国出身の学生と交流がしたいと思ったのも参加の動機である。



石崎 文音
農学部応用生物科学科 1 年

多国籍社会の台湾で、台湾だけでなく多くの文化を学びたいと思ったため参加を志望した。また自身の英語力のブラッシュアップを図りたかったのも理由の 1 つである。



市村 咲希
農学部生命機能化学科 1 年

大学の間でしか出来ない経験をしたい、英語と中国語を学びたいという理由で参加。最初は留学をするつもりなどあまりなかったが、SUSAP を通して自分の視野の狭さに気付かされ、日本を客観的に見る事が出来た。



内田 蓮
芸術地域デザイン学部 1 年

英語と中国語の力をつけたい、異文化に触れたいという理由からプログラムへの参加を決意。手に持っているのは授業で初挑戦した藍染の染める前の布。台湾では藍染をはじめとし、新しいことに挑戦することができた。



江口 舞
芸術地域デザイン学部 1 年

親日国として有名な台湾がどんな国なのかを実際に行って知りたい、海外のアジアの国の人と友達になりたいという理由で参加。台湾で一番美味しかったものは花蓮市内の屋台で食べた大きめの小籠包。



河合 佐紀
教育学部学校教育課程 1 年

自分の英語力を試してみたかったことと何か 1 つ春に自分で決めたことを成し遂げてみたかったので参加を決意した。1 番の思い出はバディと出かけた高雄旅行。これからもっと英語と中国語を学びたいと強く思っている。



合力 結香
経済学部経済法学科 1 年

英語も台湾語も触れることが出来るという理由で台湾の東華大学プログラムへの参加を決めた。台湾での 1 番の思い出は 1 人旅したことである。



坂本 佳穂
農学部応用生物科学科 1 年

語学能力の向上や自分の価値観を広げるため留学に行くことを決意。台湾では日本人の立場から台湾の原住民について英語でプレゼンテーションに挑戦した。また台湾全人口の 2% しかない原住民の友人ができた。



相良 凜
教育学部学校教育課程幼小連携
教育幼小発達専攻 1 年

自分の英語力を実際海外に行って確かめたい、自分が様々な問題や困難を解決する能力を身につけたいと思い参加を志望。今後は長期留学に挑戦したいと考えている。



副島 史津華
農学部生命機能科学科 1 年

異国の地での経験が自分自身の視野を広げ、学業などにおいて自分を高めることにつながるのではないかと考え参加を決意した。台湾では英語の能力を上げるためにも人とコミュニケーションをとることを特に意識した。



中尾 水紀
教育学部小中連携コース
初等教育主免英語科 1 年

自分の英語の実力を海外で試したいという思いと、台湾の英語教育、多民族理解についての知識を深めたいという思いから参加を決意した。



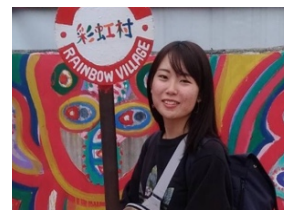
原口 ななみ
農学部生物環境科学科 1 年

もともと親日国と聞いていた台湾に興味があった。また、英語を使ったプログラムに参加してみたいという気持ちと、本格的な留学に近い体験をすることができるということからこのプログラムに参加することを決めた。



福田 沙和
農学部応用生物科学科 2 年

英語のスピーキング力、リスニング力の向上、国際交流による交友関係の幅を広げ自分の見聞を広めるために留学を決意。また、親日である台湾の歴史や文化に興味があり、日本と台湾の関係について深く知りたいと考えたのも参加の動機である。



正門 美桜
教育学部中等主免専攻
英語科 1 年

国内で国際交流をする中で英語のスピーキング力の低さを実感し、その向上のため今回のプログラムに参加。また、これからの大学生活を人に頼りすぎず自立して行きたいと思っていたというのも理由の 1 つである。



宮崎 莉緒
教育学部小中連携コース
初等主免専攻理科 1 年

英語力をあげるためには実際に海外に行ってみることが 1 番という思いから参加を決意。台湾では日本人だけで Google を頼らずに台北旅行に挑戦し、台湾人の優しさに助けられながらも旅行を楽しむことが出来た。

プログラム概要

【期間】2018年2月17日～3月16日（28日間）

【留学先】東華大学

花蓮県寿豊郷志学村大学路二段1号

【内容】台湾人学生とともに英語で開講されている授業を受け、英語の能力向上を目指しながら多様な台湾文化に触れ視野を広げることが目的としたプログラムである。

東華大学について

国立東華大学は台湾東部の花蓮に位置する国立大学で、人文社会科学部、理工学部、経営学部、先住民学部、教育学部、芸術学部、環境学部、海洋学部の8学部で構成されている。10000人以上の学生がおり、台湾だけでなく外国からも多様な民族的・文化的背景を持つ学生が通っていた。キャンパスは山と海に囲まれた立地で、大学内はとても広く、その敷地面積は台湾でも有数の大きさがあり、自然豊かでのびのびとした環境の中で勉強に励むことができた。



大学内にある広大な湖

授業

授業は月曜日から金曜日の週5日の中で受ける授業時間が20時間を超えるように個人で履修するスタイルで、現地では一人一人が別々の時間割で行動していた。東華大学にはオールイングリッシュの授業の数が非常に多かったため、英語の授業から専門的な授業を英語で幅広く学習することができた。クラスの人数については、1つのクラスにつき20～40人程度と少人数が基本だった。授業内容はそれぞれ異なっていたが、基本的にはどの授業もディスカッションやプレゼンテーションを行っていた。授業ではただ机に向かってじっと話を聞くのではなく、生徒たちが授業で発言するなど積極的に参加していくことが求められていた。

バディとの交流

このプログラムでは1人につき1人もしくは2人のバディがつき、私たち佐賀大学生は彼らに台湾での生活を送る上で様々な手助けをしてもらった。その他にもバディとは昼食と一緒に食べたりし、授業が空いている自由時間や休日には台北や高雄、台南などの観光地などへも足を運んだ。またバディだけでなく、皆それぞれ授業で知り合った外国人学生や交換留学生とも交流していた。

台湾の国柄、文化

台湾は日本よりも南方に位置する温暖な気候の国であり、どこことなく穏やかな雰囲気があった。大学内外では多くの男女が仲の良さそうな様子で一緒に行動しており、彼らを気にする人もあまりいないようだった。すれ違っても目が合う人はほとんどおらず、それぞれが好きなように過ごしていた。このように、台湾の人は日本人よりも人目を気にしないようであった。また、大学の構内には首輪を付けた沢山の犬が放し飼いされており非常に驚いた。彼らはとても大人しく、学生たちが座っている横に静かに寄り添ったり共に道路を走ったりしていた。これは東華大学特有のものなのかと思っていたが、連休に訪れた台北市内でも放し飼いされているおとなしい犬を見かけた。



学食の前にいる犬

また、台湾ではゴミの分別がしっかりとされていた。寮では紙などの燃えるゴミ、ペットボトル、プラスチック、缶、瓶などが細かく分別されており、燃えるゴミは各自で管理していた。燃えるゴミは毎日決まった時間に寮前で停車するゴミ収集車に各自が持っていく、ゴミの収集員に渡す際にはゴミ袋の中に分別できるものがないかをチェックされていた。スーパーではビニール袋は有料で、各自がマイバッグを持ち歩いていた。コンビニのレジでも割り箸やお手拭きなどは一切渡されず、資源の節約が徹底されていた。



台湾ではマイ箸の他にマイストローを持ち歩く人も

さらに、台湾では日本で時に挨拶として使用される「今度食事に行こう」などの言葉は本当に実行するものとして受け取られることが多々あった。約束などが決まるスピードも早く、「いつか食事に行きたい」といえばすぐに「いつ行く？」と聞かれ、日時や場所が次々に決まった。分脈によっては日本では曖昧な返事をすることも多いが、台湾はイエス、ノーをはっきりと伝える文化であるようだった。

台湾の物価

主に東華大学内で暮らしていた私達とその他の台湾内の地域では多少物価が異なると思うが、ここでは東華大学周辺での物価について説明する。

台湾の通貨の単位は元（もしくは台湾ドル）であり、価格は1元＝約3.6円である。（2019年4月現在）

お茶（ペットボトル）	25 元
ノート	25 元
カップラーメン	28 元
メロンパン	25 元
ポストカード	20 元
缶ビール	28 元
Tシャツ	200 元
ボールペン（黒）	30 元

化粧品や文房具、お菓子など日本からの輸入品もかなり多くあったが、輸送費がかかるためか値段はどれも日本より高価であった。また、台湾の風土上入手が困難と思われるチーズやヨーグルトなどの乳製品も同様に高価であった。乳製品などを除けば食品の値段は全体的に日本よりも安く、特に外食は日本の1/2～2/3の値段で済ませることができた。

食事

外食大国台湾。大学の近くで食事をとるとしたら、大学内の学食、同じく学内のコンビニエンスストア、大学近くの志學ストリート、この3つのうちのいずれかである。自炊する人もいるが少数派だ。外食文化なだけあって、大学内の学食も日本より種類が豊富であり、大抵1つの建物の中にいくつかの飲食店が入っている。コンビニエンスストアにおいてある食べ物もパンなどは日本と対して変わらないように思えるが、明らかに違うのは入った瞬間なんとも言えない独特な匂いがすることだ。これは茶葉蛋と呼ばれる台湾の煮卵のようなもので、これが臭いの元になっているそうだ。これ以外にも豆乳が沢山おいてあったりする。志學ストリートには朝食をメインに出す店、屋台、肉料理、鍋、定食、水餃子、麺料理、スイーツなど幅広いジャンルの店が立ち並ぶ。朝から朝食を求めて学生や地域住民が訪れ、活気に溢れている。これらに3つに共通して言えることは、どれも日本と比べるととてもリーズナブルだということだ。その分様々な食べ物に挑戦することが出来たし、私たち学生にとってはありがたかった。



飲食店が建ち並ぶ志學ストリート

まとめ

このプログラム参加者の多くは、今回が初めての留学であった。そのため、初めてのことばかりで戸惑いが多く、留学当初は何をするにも勇気がいったが、1か月後にはそれぞれが掲げた目標を達成し、人間性の面でも語学面でも成長することができた。今回、このプログラムで得た達成感や自信は、今後の生活に大いに役立つだろう。学部や描く将来像は違っても、私たち17名にとってこの1か月はかけがえのないものとなったことに違いない。皆、この経験を将来に活かそうと強く思っている。

「留学での学びと成長」

医学部医学科 1年 相浦 章吾

私は1ヶ月間の東華大学プログラムに参加して、1週間のうち平日の5日間は英語の授業に参加して英語を能動的に話し、訓練を重ねた。残りの週末の2日間は現地の学生と一緒に、台北に観光をしに行ったり、大学の周辺の海や山へ散策にいたり、美味しい台湾料理を食べたりと、充実した日々を過ごすことができた。

ここからは、私が台湾へ留学して感じたことと、それに関する考察を述べていく。

台湾に来て、まず感じたことは水の衛生状態がさほど悪くないということだ。留学してすぐの頃は、水道水は飲むとお腹を下すため飲んではいけないという話を聞いていて、水に対して神経質になっていた。しかしながら、歯磨きやシャワーで水道水を使うしかなかったため、実際に使ってみたところ、体調が悪くなることはなく、問題も起こらなかった。現地の人も皆同じように水道水を使っており、健康に過ごしていた。この経験から、私を含め日本人は清潔「過ぎる」のではないかと考えた。台湾の水道水の水準で問題なく過ごせるにも関わらず、私たちはいつでも蛇口をひねれば飲める水が出てきて、それをお風呂や食器洗いにまで使っている。もちろん清潔な衛生環境であることは良いことだが、台湾で過ごしてみて、いかに自分がきれいな水が無駄遣いして、過度にきれいな環境を求めているか、ということに気づいた。そのおかげで、帰国してからは水の浪費をしないように気をつけるようになった。

しかし、トイレの衛生状態は良くないと感じた。台湾では、水圧が弱いと詰まってしまうという理由でトイレに紙を流すことができず、そばに置いたゴミ箱に捨てなければいけなかった。1ヶ月過ごしているうちに、あまり気にしなくなったが、やはりそういった汚物は流してしまわないと菌が繁殖したり、臭いが残ったりして健康上良くないように思った。幸いなことに私は何も体調に変化はなかったが、昔であったら感染症のリスクも高かったのではないだろうか。このような状況になった背景として、私は日本の植民地支配が1945年で終わったことが関係しているのではないかと考察した。当時日本は最高水準の建築技術で台湾の建物を作っていたが、統治が途中で終わったために、現在の日本のようなトイレ・下水管を作る技術をも失ってしまい、結果として日本との差が生まれてしまったように思われる。同じくして、トイレトペーパーの普及も進まなかったのだろう。店にはトイレトペーパーが販売されていなかった。この考察を通して、日本の技術力が素晴らしいものであることを確認するとともに、国の発展のためには外国の支援が不可欠である、ということに気づいた。

次に、台湾の人々について感じたことを述べる。一貫して言えることは、台湾の人々は皆とても親切であるということだ。例えば電車やバスで人の動きを観察していると、日本と違って、お年寄りや荷物をたくさん持った女性等に対してかなり積極的に席を譲っていて、日本以上に他者を敬う文化が発展していることに気づいた。また、お店でお土産を買った時にお菓子をサービスしてくれたり、日本語で「ありがとうございました」といつてくれたり、人間の温かさを切に感じた。ただ、ここで

一つ考えたことは、私が旅行者であって永住者ではないからこそ、ここまで優しくしてもらえたのかも知れない、ということだ。日本でも、旅行者には優しいが在日外国人に対しては厳しい態度をとるという人も一部だがいる。人種の壁を越えて私たちが仲良くするためには、旅行者・永住者の分け隔て無く皆が互いに親切になる必要があり、そのために私たち日本人は、他者を敬う態度を台湾から学ばなければならないだろう。

続いて、学習面での自らの変化について述べる。私は英語の学習をこのプログラムでの第一目標としていたため、自発的に知らない人に話しかけに行き友達になったり、英語の教養の授業を多数履修したりして英語にたくさん触れるようにした。1年生の間に勉強した単語もあって会話はスムーズにでき、授業にも問題なくついて行くことができた。この経験のおかげで自らの英語力に自信を持つことができた。ところで、授業を受けて台湾の学生とディスカッションをしていると、教授の話の内容の理解に差があり、自分のリスニングの力が不足していることに気づくことができた。英語に対する自信が持てたことで勉強に対する意欲が上がったことに加え、今後はリスニングを重点的に鍛えていく、という方針が立った。帰国後の現在もリスニングのトレーニングを継続しており、もっと実力をつけてから、いつか必ず英語圏へ留学をしようと思うようになった。

バディとの交流についても述べたいと思う。私のバディはとても親切で、わからないことは何でもサポートしてくれた。ただ一度だけ、彼と揉めたことがあり、そこで私は「はっきりと意思を伝えるべきだ」という言葉を信じて意思表示をしたところ、意思は伝わったが、同時にバディを傷つけてしまったようで、はっきり言うにしても言い方を考えることが必要なのは、日本でも海外でも同じだと反省した。また、バディは今こんなことを考えているのだろうか、怒っているのだろうか、などと憶測で考えすぎてすべて悪い方向にとらえてしまっていた。しかし、実際にバディと会って過ごしていると全くそのようなことはなく、私のことを思いやりの行動をしていたことがわかった。この経験から、物事について憶測で考えすぎるのは良くない、ということ学んだ。そのおかげで心に余裕が生まれ、人間関係だけでなく、勉強やその他の仕事も捗るようになった。

異文化交流において戸惑うこと、不快に感じることは色々あったが、振り返ってみると目標を達成できた上、日本ではできない貴重な経験ができて、参加して本当に良かったと感じている。特にバディとの交流で、精神的な成長を遂げることができたことは本当に今後の人生に役立つことだと信じている。

このような素晴らしい経験ができたのは、私を支えてくださった国際課の方々をはじめとした関係者の皆様の手厚いご支援のおかげです。本当にありがとうございました。(2507字)



台湾の学生との交流会にて司会を務める

「東華大学で培ったこと」 教育学部中等教育主免英語科 1年 中山 聡

～はじめに～

私は東華大学プログラムに副隊長として参加し、多くの貴重な経験して、日本では得られない多くのことを得た。その成果を目標に即して4つのテーマ別に挙げていきたいと思う。

①積極性の重要性

今回の研修で積極性の重要性を実感した。ある授業では、開始とともに席を立ち、相手を見つけて会話を始めなければならない。突如として始まったというもあり、相手を見つけれずにいたが、東華大学の生徒から話しかけてくれた。後に、積極的に話しかけようと心に決め、最終的には、多くの友達を作ることができた。様々な場面で積極性が必要である。なぜなら自分で動かないと何も起こらないからだ。また、台湾人は控えめな人が多く、こちらから話しかけないとよそよそしくされてしまう。これは台湾人だけに限らず、日本人にもその他の国の人にも言えることであり、そのような人と関係を持つには、積極的に話しかけることが大事なのだと思った。あの時の状況を振り返ってみて、次の週の授業では積極的に話しかけることができた。そこで気づいたことがある。コミュニケーションをとる際には、まず相手の目を見ることがと、相手が控えめな人であればアイスブレイクをする必要があるということだ。この研修でアイスブレイクには相手を褒めたり、自分のことを先に説明したりするなどが効果的だとわかった。これからは培った積極性をあらゆる場面で生かしていきたいと思った。

②言語力だけではないということ

台湾は、中国語と台湾語の二言語を主に使用している。東華大学の生徒でも一部の人しか英語を話せる人はいなかった。コミュニケーションを取りたくても、母国語が違うために、英語で会話をとらなければならない。東華大の生徒の英語力のレベルはほとんど変わらない様子であった。お互いが拙い英語を話すために語彙力が足りず会話が詰まったり、伝えたい内容に誤解が生まれたりした。その時に役に立ったのがボディランゲージである。レストランを探すなら食べるジュースチャーをしたり、わからない単語があれば身振り手振りしたりして伝える努力をした。特に一番困ったのが、台北にいたときに、どのバスに乗って良いかわからず、英語で尋ねてみたが、通じずに困った顔をされた。どうにかして伝えようと、必死に身振り手振りを繰り返してようやくバスに乗ることができた。この経験から、どんなに言語が違っていても、語彙力が足りなくても、伝える努力をすれば人は通じ合えるのだと学んだ。

③日本と台湾の文化面での違い

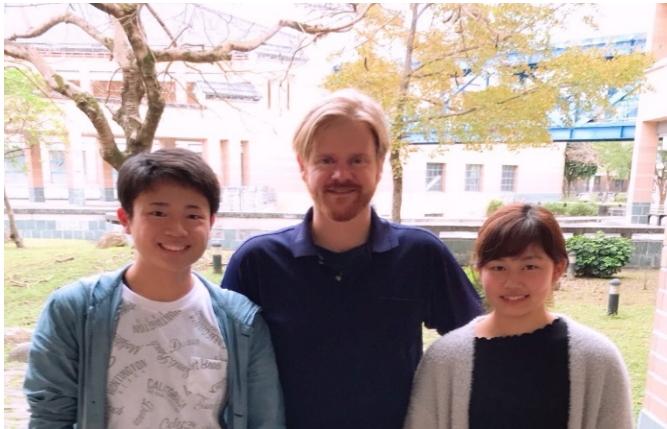
まずは花蓮市と日本の飲食店を比べてみようと思う。日本での飲食店は基本的に扉をあけて店内に入り、メニューを見ながらあれこれ注文していく。一方で花蓮市の飲食店は、扉がない。道路に直接面していて誰もが入ることができる。この場合の誰もがというのは、小さな虫から犬までいろいろな動物も含むのだ。ご飯を食べながらゴキブリやハエがいるのは当たり前で、犬がノサノサ入ってきて足元に寝転がってくるのも当たり前の光景であった。そんな生活も一ヶ月の間で当たり前となった。というよりも3日目ですぐに慣れた。また注文の方法も全く異なっていて、写真が付いておらず文字だけで注文をしなければならない。店員に直接言うのではなく紙に正の字を書いて注文する。この時の私は、パディに訳してもらって注文をしていたのだが、今となれば文字だけ見て注文して、なにが来るのかわからない楽しさがあっても良かったのかもしれない。パディに頼ってしまっていたが、パディと英語でコミュニケーションを取りながら食事ができたことは高く評価したい。また、文化面での違いは寮にも現れた。寮には蜘蛛の巣が張っていたり、ヤモリが平然と現れたり、昆虫と共存するのが当たり前であった。このように、日本との暮らしとは当然違う中で、それにいかにして適応し生活していくのかが大切である。この研修では自分の適応力に驚いた。周りの女子が虫が出たことにキーンキーン騒いでいる中、「こんなこともありえるか」と早々に吹っ切れて、通常通り生活を行なった。自然が豊かな環境で勉強が出来たこと、一ヶ月生活出来たことに感謝したいと思う。

④日本と外国（台湾）の大学の違い

授業での違いを見ていく。日本の英語教育は、生徒が“受ける”授業がほとんどで、受け身である。一方で、東華大学では生徒が中心であった。成績の評価基準として、プレゼンテーションやディベートが含まれていて、テストの実力だけでなく意欲がないといい評価はもらえない授業がほとんどであった。特に私が興味深かったのは、Andrew先生の授業である。この授業では100分間終始クラスメートと会話をし続ける。途中でリスニングテストを挟むが、授業のほとんどを英語のみのコミュニケーションで終わる。おそらくどんな授業よりも英語でのコミュニケーション能力が上がると思った。また、先生の指導の仕方がグッときた。Andrew先生は生徒が話し続けられなくても「大丈夫大丈夫、深呼吸して」とずっと励ましてくれる。なんと心地よい授業なのだと感動した。将来英語の先生になりたい私にとっては画期的な授業であり、ぜひ取り入れたいと考え、いいことかわからないが授業を録音までしてしまった。このような、海外での授業を受けてみることで、将来の自分が施す授業に対しての工夫が生まれてくるため、さらに他の国へ留学してみたいと思った。多くの工夫をいい意味で盗み、将来に活かしていきたいと考える。

～まとめと1ヶ月間の感想～

あらゆる日本との違いに対して屈せずそれに立ち向かうことができたことに対して自分を褒めるとともに、この研修で得た、コミュニケーション能力や素晴らしい授業方法などを今後の生活に活かすことが我々研修員の使命だと考える。履修した授業はどれも楽しく参加でき、1ヶ月間という短い期間にもかかわらず快く受け入れてくれたことにとても感激した。現地の友達と仲良くなることができ、学び、遊び全ての面で楽しく30日過ごせた。留学を許してくれた両親や、奨学金制度に感謝し、次のチャンスがあればぜひ参加したいと思う。



Andrew 先生と最後の授業で記念に撮った写真

「海外で経験できること」

教育学部幼小連携教育コース特別支援専攻

1年 矢野 裕子

私は ①自分の英語力がどのくらい海外で通用するか身をもって体験し特に speaking の英語力を向上させる、②東華大学は世界各国から留学生が集まる大学と事前に聞いていたので、様々な国出身の学生と交流を深める、③台湾の歴史を学びながら過ごす、④留学とキャリアプランのつながりとして海外の教育制度について学び、将来の夢である小学校教師になるために役立てる、という4つの目標を軸に東華大学プログラムに参加した。留学を終えた今、このプログラムに参加した1ヶ月間の自分の活動を振り返ってみると、当初の目標を十分達成することが出来たと思う。そしてこれら目標を達成するまでに日本では決して経験できないであろうことに多々直面した。本報告書では特に印象に残った経験の③に関する台湾の歴史から気づいたこと、④に関する日本と台湾の教育現場の共通点について述べていく。

私が歴史について深く考えるきっかけとなったのは、台湾の祝日で四連休のときになったときの出来事だ。まず、私は初日に台北を訪れた。その際泊まったホテルの近くに二二八和平公園があった。この日はちょうど2月28日で感慨深いものがあり、私はこの公園について少し調べてみることにした。すると、元々は日本が台湾を統治していた時代に大規模な都市公園建設を計画し、造られた台北新公園というものであることが分か

った。さらにその後、第二次世界大戦で日本が負けて、中華民国に支配されるようになったときに勃発した二二八事件の中心地だったため、犠牲になった台北市民を追悼する意を込めて今の公園名に改称されたと分かった。そして2月28日が祝日であるのは二二八事件が大いに関係しているということに気づき、歴史を学ぶ大切さを感じた。また、この事件は日本も関わりがあることなので日本との歴史的関係もしっかりと知る必要があると感じた。2日目はバディの実家でホームステイをした。バディの故郷は台湾の西部に位置する苗栗という場所だった。バディのお母さんが朝食にその地の伝統料理を振舞ってくれた。菜包という肉まんのようなものだった。バディの弟が「僕達はみんな客家でこの料理は客家の伝統料理です。」と話してくれた。客家とは漢民族の中の移住を繰り返した一支流であり、台湾の西部には多くの客家系の人々が住んでいるということも分かった。私は高校時代に世界史を選択していたため、近代の中国史で特に印象に残っていた孫文が客家出身であることを思い出した。台湾ドル紙幣の100ドルには孫文の肖像画が描かれている。そしてバディの出身小学校を訪れた際に校庭に台湾の国旗と一緒に孫文の肖像画が掲げられているのを見た。台湾人にとってとても大切な人物であるのだろうと思った。孫文は日本に亡命していたこともあり、これも日本と関わりがあることだと考えた。台湾と日本の間には深い繋がりがあることを身をもって実感した四連休だった。他国と交流する際は今現在の関係性をみるだけでなく、歴史的背景をみることでより良い関係が築けるのではと思うようになった。

次に教育現場における共通点は、英語教育に焦点を当ててみると、両国ともに教育格差が浮き彫りになるということである。私の台湾でできた友人は皆、高い英語力を持っていた。そのため、彼らに助けられながら私は英語を使ってコミュニケーションをとることができた。彼らと一緒に時を過ごしている際にふと、事前に課題図書として読んだ本の『世界の幼児教育・保育改革・学力』のことについて思い出した。その本によると台湾では幼児期に十分な英語教育を受けた私立幼稚園出身の子供は英語力が非常に高いということだった。そのため幼稚園は私立幼稚園に通っていたかどうかを彼らに尋ねてみると、大多数の友人は「私立幼稚園に通っていた。」と答えた。そして私は大学の外に出た際に偶然2つの私立幼稚園を目にすることができた。どちらの幼稚園も花蓮市内、台北市内の中心部にあった。さらに花蓮市内でみた幼稚園は英語で生活をしネイティブの先生がクラス担任を持つ幼稚園であることを後でバディに聴かされた。一方で私立幼稚園に通うことができる子供は限られているというのが現状だ。経済格差や地域格差が主な原因とされている。その格差が教育格差へとつながっていく。このような現状は日本でも同様のことがいえる私は思った。日本で英語教育に焦点を当てた際に、教育格差が顕著に現れる場面は英検などの英語の資格や検定だと私は考えた。最近の大学入試では英語の資格や検定試験を利用して受験をする大学が増えている。さらに再来年度から始まる大学入試共通テストも4技能求められるようになるので英語の資格や検定試験が必要となってくる。どれも民間によって実施される試験になるので、受験するためには一定の費用がかかったり、地域によっては受験会場がないので容易に受験することができなかったりする。経済力や地域によって格差が生まれてしまうといえるだろう。この差が台湾の現状と同じように教育格差へとつながると考え

られる。これらのことから私は、全ての児童・生徒が英語教育を平等に受けることができるかどうか、両国ともに問題になっている教育格差を緩和するために考える必要があるのではないかと思うようになった。このように、同じような問題を抱えている国同士の現状をみることで新たな見解や、解決策が生まれてくるものなのだと実感した。

台湾で1ヶ月生活してみると、日本で生活していたら気づけない発見をたくさんすることが出来た。国が違うから違いがあって当然だと、はじめは思っていたため異なる点ばかりに目がいつていたが、おわってみると共通点や深い関わりの方が多いのではないかと思うようになった。このプログラムだけに留まらず、今後もバディなどとの台湾との交流を続けて行き、新たな発見に出会いたいと思う。また、東華大学で出会った様々な国の留学生の母国も訪れて、視野を広げたいという新しい目標をもつこともできた。今後もこのプログラムでの経験を活かして色々なことに挑戦していきたい。



バディの出身小学校の校庭に国旗や孫文、校歌が掲げられたステージ

「台湾の良さ、日本の良さ」

農学部応用生物科学科 1年 石崎 文音

私はこの台湾研修を通して、これまでの19年の人生の中でも身に付けられなかった貴重なものを得て、学習することができました。台湾への留学を決意した理由は、異国の文化を学び自分自身のスキルアップを図る事と、語学力の向上の二点でしたが、自分が想像していたよりはるかに多くの貴重な体験をし、多くの事を学ぶことができたと思います。

一つ目は環境意識についてです。台湾では環境意識が全国的に非常に高く、殆どの人々がエコへの取り組みに積極的である事に気付きとても驚きました。まず、台湾のコンビニやスーパーでは、ビニール袋、割り箸などがもらえません。ビニール袋は有料で置いている所もありましたが、割り箸やスプーン、フォークの販売は全く無く、慣れないうちは皆非常に戸惑いを感じていました。私もコンビニでお弁当を買った時にお箸がもら

えず、店員のミスだと思い込みとても困ってしまった事があります。後に現地の学生に確認すると、現地の人はほとんどマイ箸やマイストロー、マイバッグを持ち歩いていて、割り箸等はほぼ使わないという事でした。また、お風呂のお湯を温めるボタンを押さないとお湯が出ないのですが、つけっぱなしだと電気が切れる仕組みになっていました。これにより、自動的にお風呂の電気の無駄遣いが防止されています。このように、台湾の学生達も無意識のうちに、環境に対する意識を高く持っていて感心しました。更に、台湾では分別が徹底されており、至るところにゴミ箱があり道にゴミが落ちていません。ゴミ箱も資源ごみと一般ごみ、ペットボトルなどに別れているゴミ箱がほとんどで、ゴミ回収の際、人がチェックしながら回収する為紙やプラスチックが残っていると回収してもらえない事も多くありました。台湾では、リサイクルに対する考え方も日本とは比べ物にならない程積極的である事が伺えました。

二つ目に学んだ相違点は、英語教育についてです。日本にいる時から、海外の英語教育は優れていて学生が自発的に発言するような授業タイプであることは知っていましたが、実際に授業を受講してみて、本当に台湾の学生は意識が高く驚きました。まず、台湾の人々は皆とても発音に長けていました。私はあまり発音が得意ではなくネイティブと話してもうまく通じないことが悩みでした。しかし、台湾の学生がネイティブと流暢に会話している姿を見て、幼い頃から英語に触れているのではないかと考えました。授業内容も日本とは大きく異なり、文法の授業はほとんど無く、コミュニケーション、発表、ディスカッションがメインの授業ばかりです。そのため、学生が授業中意識的に発言している姿が多く見受けられ、文法や語彙力よりも滑らかに伝えやすく話せることが重視される事を知り衝撃を受けました。しかし日本人の方が、語彙力があると実感する場面も多くありました。そのため、知識を身に付けるだけではコミュニケーションを図ることはできず、実践的な語学力を高めるためには、自分の口や耳を使い実際に英語に触れていくことがとても大切な事ではないかと感じました。また、年配の方やスーパーやコンビニ等の店員の中には簡単なフレーズが全く通じない人がおり、英語能力のレベルの差は意識の差なのではないかとも思いました。確かに、台湾の学生は皆とても学習に対する意欲が高く、授業態度の面でも日本よりはるかに優れていると実感することが多かったです。台湾では、授業中に居眠りをしたり携帯を操作したりする学生は一人も見受けられませんでした。このような学習に対する意識の差が学力差に結びついているのではと思い、改めて目標設定やモチベーションを高めることの重要性を認識しました。

最後に、生活習慣についてです。台湾に上陸してすぐ、食文化の違いが顕著に見られました。台湾のソウルフードである燻製卵などはコンビニやスーパーなど至る所に置いてあり、学生がおやつ等として頻繁に食べている姿が見受けられました。料理の味付けでは、スパイスが効いているものや甘目に調理されているものなどがあり、薄味が基本の日本料理とのギャップを強く感じ驚くことも多かったです。また、日本のお菓子やインスタント食品もたくさんの場所で販売されていましたが、値段が他の商品と比べても日本円に換算しても桁違いに高く、品質

が高いとされている日本食はとても高級な食べ物として扱われていることもわかりました。次に、生活リズムの違いについてです。台湾の学生とともに生活していく中で、台湾人は皆朝遅く起きてランチを取り、夜遅くまで起きて夜食も食べ、のんびりとした生活を送っていることに気付き驚きました。全体的に台湾人は皆寛容で穏やかな性格の方が多くイメージが強かったのも、このような穏やかな生活リズムが関係しているのではないかと思います。

今回の留学を通して、日本の良さと台湾の良さをどちらも実感することができたと思います。日本是世界有数の先進国であり、恵まれすぎている点も多くあるのだと考えさせられる場面もありました。しかし台湾人はそれぞれに自分の国家や文化に誇りを感じていて、不自由な部分があってもプラスに考える事のできる人がほとんどです。台湾には、環境意識や学習環境だけではなく数え切れない程良い点があり、日本も見習わなければならないと思う所もたくさんありました。これは日本にいてだけでは絶対に体験することのできない貴重な経験です。この想いを将来の活動に活かしていきたいと強く思いました。そして、これからの学生生活を送る中でこの経験を糧にして、自分ができる点から率先して周囲に働きかけ、大学内だけでなくより広い環境を改善していけたらと思います。



リサイクルが徹底されている台湾のゴミ箱

「意識改革」

農学部生命機能科学科 1年 市村 咲希

私は一ヶ月の台湾の東華大学プログラムを通して大まかにわけると3つの日本と台湾の違いを見つけました。

1つ目は、環境意識の違いです。台湾のコンビニやスーパーへ行くと、レジ袋や割り箸はもらえずどこも有料でした。また寮の共用スペースの消灯時間は夜の九時でそれ以降は真っ暗な中そこで過ごす人がたくさんいました。その他にもトイレにトイレットペーパーが設置されていないなど日本では考えられないことがたくさんありました。台湾人にとってはそれが当たり前になっているようでしたが、私たち日本人は動揺を隠しきれなかったと共に、日本はかなり資源を無駄にする環境を作

っているのだということを身にしみて感じました。私は日本にいる時、スーパーやコンビニへ行ってもレジ袋は必ずもらっていたし、割り箸も必要でないときももらっていました。そして、そのことを当たり前と思っていた自分がいます。台湾に行き本当に自分は何も考えられていなかったことを痛感しました。

2つ目は、衛生面の違いです。台湾のトイレは基本的に日本のトイレほど掃除をされていませんでした。お風呂とトイレが同じところが多いことも台湾の学生から聞きました。夜市ではフルーツや魚介類などがそのまま並んでいて中にはハエや小さな虫がくっついていたり、箸や皿が汚れていたりするものもありました。日本の衛生管理に慣れていての分かなり私には抵抗があり、1か月の生活で私が帰りたいと思った唯一の原因でした。しかし、台湾人にとってはそれほど抵抗はないようで住み続けることで免疫はつくものなのだと実感しました。

3つ目は教育方針の違いです。台湾は日本よりはるかに英語教育に力を入れていました。オールイングリッシュの授業の数が日本の大学とは比にならないほど多く、また多くの台湾の学生は英語にかなり慣れている印象を持ちました。私は最初向こうの学生が英語で話していることを理解するのに精一杯で、自分の思いを伝えることには気も回りませんでした。現地の学生に話を聞いてみると多くの台湾人は幼稚園から英語を勉強していると言っていました。私は留学に行く前までは日本の教育は進んでいると思っていましたが実際はかなり遅れていることがわかり非常に焦りました。また、日本は座って教授の話を一方的に聞くというスタイルの授業が多いですが台湾はアクティブで話し合いや発表の多いスタイルの授業が多い印象を受けました。そのため多くの学生が発表に慣れていてパワーポイントをうまく使いこなしていました。台湾の学生は自分の任務を果たすべく発表を積極的にしているのに自分は佐賀大学で90分本当に集中しきれているのか、またどれだけのことを収穫しているのかと自分の日本での勉強スタイルを見直すことができました。また、授業中の学生の様子も日本と違いました。日本の学生は授業中スマートフォンを使って授業とは関係のないことをしている生徒がいるように感じます。その反面、台湾の学生は教授の言ったことに反応する学生が多く、スマートフォンを使う学生はこの一か月で一人もみませんでした。本当に意識の持ち方が違うことを感じました。

私は以上の発見によって自分の未熟さや、自分の考えの甘さを身に染みて感じました。これら3つの違いは留学に行く前までは全く気付くことはありませんでした。また、留学に行かず、このことに気づかず大学四年間過ごしていたら…と考えると今回の留学は私の人生にとって大きなターニングポイントであったと思います。

一か月台湾で過ごして常と感じたことは台湾人は本当に親日であるということです。日本人というだけで優遇してくれたり、簡単な日本語で話しかけてくれたりと常に親切さを感じていました。スーパーやコンビニエンスストアで「日式」から始まる商品や、日本で売られている商品が売られているところにも親日があふれていました。特に日本の学生に一人か二人ついた台湾の学生のパディーの親切心は常に感じていました。毎週末私たち日本人を台湾の観光名所に連れて行ってくれたり、台

湾で有名な食べ物を食べさせてくれたりしました。バディー以外の人でも授業で会話をして、仲良くなった人が昼食を誘ってくれました。本当に彼ら無くして、私の充実した一か月は無かったと思います。彼らが口をそろえて言うことは「日本人が好きだ」という言葉です。その理由を考えた結果、台湾統治の約50年間の日本への印象が良いという歴史的背景ももちろんあると思います。その他にも台湾のテレビでは複数の日本のチャンネルがあり、日本のアニメやドラマが好きという人が多いことや、また、実際に夜市や街へ行って見て日本の安心安全な環境や治安の良さも日本が好かれることにつながるのだろうと思いました。

最後に、私は今回の留学の目標の一つに「世界中に友達を作る」ということがありました。バディーとの交流だけではなく、たくさんの台湾の学生と多くの時間を過ごせ、また連絡先も交換したため帰国した今も多く台湾人と連絡を取り合っています。中国語の授業では13か国の学生が授業に参加していたため、台湾以外の学生とも交流することができました。そのため、私は目標を達成することができたと思っています。日本に帰国した今、この目標をさらに達成するためには自ら動くことが必須であります。自分から国際交流のイベントに参加したり、バディーに応募したりと留学前には考えてもいなかったことに自ら動く闘志に満ちています。留学に行ったことに満足して終わるのではもったいないです。日本に帰国してからの自分の動き方がこの留学を採点することを心に留めこれから日本で過ごしていきます。(2312 年)



よさこいの衣装で一番お世話になったバディーと撮った写真

「台湾留学を振り返って」 芸術地域デザイン学部 1 年 内田 蓮

[はじめに]

今回私は台湾で1ヶ月過ごすにあたり、「普段と違う環境だからこそできることをする」という事を常に意識して行動した。この1ヶ月間で、多くの人と出会い、様々な経験を積んで成長することができたと感じている。その中でも特に印象に残っている出来事を通して自分が考えたことを3つのテーマに分け、述べたいと思う。

[1. 習慣はどこから]

台湾に来て衝撃を受けたことの1つに、台湾の外食文化が挙げられる。台湾人は基本的に3食外食で自炊は少数派だ。そのため大学内や近くの志學ストリートには飲食店が多く、ほとんどが1食20~150元(約70~525円)とかなりリーズナブルだ。私は、この台湾の外食文化は台湾の別の習慣に繋がっているのではないかと考える。例えば、台湾人は初対面の人ともよく一緒に食事をする。日本では仲間内でしかご飯にいかないのが最初戸惑ったが、すぐに慣れた。外食の回数が多い分、日本よりも食事に誘うハードルは低いと感じた。また、台湾の友人は「よく私が払うよ」と言ってくれ、ご馳走になる機会が多くあった。この奢りの習慣も外食の回数が多いからこそ、次自分が払える機会がすぐに巡ってくるため、日本よりも罪悪感がないと感じた。そして印象に残ったエピソードがある。バディとそれぞれの国の恋愛観について話していた時、台湾の男子学生は気になっている女子に朝食を買って来てアピールすると聞いた。バディももらったことがあると言っていたし、実際にあることなのだろう。台湾では食事をテイクアウトすることも多く、台湾ならではの感覚を感じた。では、日本の食文化から生まれた習慣とはなんだろうと考えて見たときになかなか思い浮かばない。なぜならば、習慣とは私たちにとって「当たり前」だからだ。台湾が私にとって異文化圏であるからこそ、これらに気づくことができたのではないかと。そして台湾で生活し現地の習慣に触れて初めて、日本で当たり前だったことが日本独自の習慣だということに気づく。さらに、これらの習慣の元となる文化にもさらなる要因が存在するのだろうと考えると、習慣のルーツを探るのは面白い。これこそ留学をし、異文化圏で生活することの醍醐味と言えるのではないだろうか。

[2. 身近なアートを日本にも]

私は芸術地域デザイン学部所属しているが、正直、芸術に興味を持ち始めたのは大学に入ってからで、学部の他の人達と比べて知識はほぼ無い。しかし、そんな私でも台湾はアートが熱いと思えるほど、台湾には身近にアートが存在していた。大学構内にもグラフィティアートや横断歩道の白地の一部分がARTとくり抜かれているものなど遊び心が見えた。基本教養科目にもmixed media artの授業があり、作品制作を楽しむことができた。台北は特にアートが盛んであり、作品展が多く開催されていた。しかもその多くが無料で、駅の地下など様々な場所である。日本でアートに触れようと思うとアンテナを張っておかないと中々情報が入って来ないし、美術館に行くにも少し意気込まないといけない。その点台湾は日本に比べ自由で気軽にアートを楽しめた。これから私は主として地域活性化について学ぶつもりだが、台湾のように芸術がもっと身近になるような働きかけができたらいいなと考える。それこそ芸術で地域活性化を図る私たちの学部求められることである。そのためにも、これから学部が募集するイベントのボランティアやインターンシップなどに積極的に携わり実践的に学んでいきたい。

[3. 成長には痛みが伴う]

私が今回、東華大学プログラムに参加するに当たって掲げた目標の1つとして、英語力の向上が挙げられる。英語力の中でも、特にスピーキング能力を高めたいと思い、Andrew先生のEnglish oral trainingという授業を受けることにした。台湾で受けた授業で、一番自分の英語力の無さを痛感するため、行く前に最も気が重くなる授業だった。この授業はまずcocktail

party と言って、ペアを探して数分間会話を続けることから始まる。初対面の人と話すことがあまり得意でない私にとって、それがまず、第一関門だった。そしてあるテーマに沿って隣のひととの意見交換やグループディスカッションに移る。周りは自分よりも何倍も英語ができる人達ばかりで、それがさらに自分の英語力の無さを痛感させた。全部で4回、この授業を受けたが毎回悔しさが残った。しかし、4回目の授業が終わって振り返ってみたとき、はじめの方と終わりの方では「自分が何に対して悔しいと思っているのか」が変化していることに気づいた。はじめは、主に自分から話せなかったに関して後悔していたが、授業を重ねるに連れて、話したいことは沢山あるのに自分の語彙力が足りないことを悔やむようになっていた。もっと深い話がしたいと思うようになっていた。わからないことはペアに聞くように心がけた。気がつけば、休憩時間中ずっと隣の席の人と話が続いていたり、この授業でできた友人のサークルへ行ったりと、もはや自分から話しかけたり、英語を話すことへの抵抗はなくなっていた。正直、この授業は自分の現状に正面から向き合えなければならず精神的にきつかったが、一番自分を成長させてくれた授業だと実感している。この授業で感じた悔しさを、この先英語を勉強するモチベーションに変え、努力を続けていきたい。そして、私が言葉に詰まったときも、大丈夫だよと助けてくれたクラスメイトや、快く授業を受けさせて下さった Andrew 先生に心から感謝したい。

[まとめ]

私にとってこの1ヶ月間は人生で一番充実した1ヶ月間だった。現地で得た経験、友人はかけがえのないものであり、きっとこの先も忘れることはないだろう。このプログラムに参加したことで自分自身の将来や生き方、人との関わり方について深く考えることが出来たし、長期留学に挑戦してみたいという新たな目標も生まれた。異文化の面白さも知ることができた。このような素晴らしい経験を積むことができたのも、周りの人達の支えがあったからだということを心に刻みこれからの大学生活に活かしていきたい。(2457字)



課題図書で読んだ Treasure Hill Artist Village

「台湾プログラムに参加して」 芸術地域デザイン学部 1年 江口 舞

私がこのプログラムに参加しようと思った理由は、親日国として有名な台湾という国に実際に行ってみたいと思ったからである。大学の授業で1年間学んだ基礎的な中国語を使用し、

現地で生活してみたいと思ったこと、現地で開講される英語の授業を沢山受けたかったこともまた理由である。私は留学前、台湾について多くを知らなかった。台湾に対して抱いていたのは、日本よりも温暖な国で、親日的な国だというイメージだ。経済的には日本よりも発展がやや遅れているというイメージもあった。

実際に台湾の大学で過ごしてみると、とにかく台湾の人の親切さを感じる場面が多々あり感謝が尽きなかった。例えば台湾に行ってもいない頃、大学で入学許可を貰うためにいくつかのオフィスに印鑑を貰いに回ったことがあった。一ヶ月という超短期間の留学に現地の方々も戸惑っていたようだが、沢山の方が親切に対応してくださった。ここではない、分からない、と解決法も教えてもらえずただ追い払われるようなことはただの一度もなかったのだ。たとえ分からなくても、他のスタッフさんに電話をして親切に対応してくださった方も複数いらっしゃった。無知なまま、違う言語でいきなり尋ねてきた外国の人に対して、台湾の方々はどうしてこれほど親切にできるのだろうかと思心感心した。このような場面が一ヶ月間の大学生活の中で数え切れないほどあり、毎日台湾の方の親切心によって心が温まるばかりであった。二人のバディの友人も私達にとっても親切にしてくれた。彼女達は私が台湾に行く前から連休の台北旅行を計画してくれ、ホテルや電車のチケットを予約し、旅行当日には沢山の台湾の名地へ案内してくれた。日常生活では分からないことがあればいつでも聞いてねと言ってくれ、一ヶ月の間様々な場面で沢山のサポートをしてくれた。彼女達が連れて行ってくれた地元のレストラン、お店はどこも素敵な場所で、台湾の物や料理を毎日満喫することができた。美味しい台湾の料理の中でも、地元の子が気に入るほど特に美味しい料理を味わえるお店に連れて行ってもらえた私は心底幸せだったと今更ながら思う。彼女達と関わって行くうちに、台湾と日本の違いを意識し違和感を覚えることは無くなっていった。台湾の人達は日本の文化に好意的で、特にアニメや漫画などのサブカルチャーに関しては私達日本人よりも詳しいのではないかなと思うほどだった。暮らしている国は違うが共通の話題で話が広がって行くことが多々あり素直に嬉しかったし、その度に私も台湾の文化をもっと知りたいと強く感じていたのを覚えている。台湾の人は日本に好意的で日本の文化に興味を持っている人も多いが、それに対して日本の人々は台湾についてあまり多くを知らないように感じる。時差一時間の南の方角に、台湾という素敵な国がある事を日本人はもっと知るべきだ。温暖な気候に何処と無く穏やかな雰囲気、さらに親切な人々・・・一度台湾に行ったらおそらくまた行きたくなるだろう。実際に台湾でひと月生活した私は帰国してすぐであるにも関わらず、もうすでに台湾に行きたい。近い将来、家族で台湾にもう一度いければ、と密かに思っているほどだ。これから私は台湾という国の素晴らしさをもっと国内外に発信していきたいと強く思っている。

また、台湾に行ったことで英語に対する見方が少し変わったように思う。バディの子のうちの一人とは英語で会話をしていたが、彼女は常に私の拙い英語に耳を傾け私が何を言おうとしているのかを理解しようとしてくれていた。私は自分の英語力の低さを自覚しており、恥ずかしさや決まりの悪さから日本にいる時には滅多に英語を話そうとはしなかった。しかし台湾に

行き、常に真摯に私の英語を理解しようとしてくれるバディの子と話しているうちに、英語を話すことに対する抵抗は徐々に無くなっていったように感じている。台湾への留学を経て、これからは積極的に英語を使って会話を続けたいと思えるようになったのだ。日本にいるうちは、英語はネイティブのように上手く発音しなければならないものだという無言の圧力のようなものを感じ怖気付いていたが、日常的に意思疎通を図る上ではそうでなくとも良いと思えるようになったのだ。誰かが言っていたが、そもそも言語とは自分の意思を相手に伝える手段の一つなのである。だから発音などは二の次で、とにかく言いたいことが伝わればそれで十分なのだとその人は言っていた。相手に伝えたいという一方の意思と、それを理解しようというもう一方の意思さえあれば、国や言語が違うもの同士でも意思疎通ができるのだと台湾での暮らしを経て改めて感じた。

他にも、台湾で暮らしてみても、台湾は日本よりも人目を気にしない文化なのだと感じた。多くの男女が親しげな様子で一緒にいるし、すれ違うときも相手のことをあまり見ない。その風潮のおかげかそれぞれのびのびと生活できているように見えた。私はこの台湾の雰囲気非常に気に入った。あまり人目を気にしすぎず、他人に迷惑をかけない範囲で日本よりも自分の好きなように暮らしていけそうな台湾の風土が私は好きだ。

最後に、今回の台湾短期留学は、異文化の中に身を置き様々な事を知り、考える良い機会となった。日本の外に出てみなければ決して知りえなかった景色や情報を沢山知ることができたのに加えて、自分の中で無自覚に形成されていた様々な価値観が更新されたように感じる。無知ゆえの偏った価値観や固定観念を持つ前に、私たちは様々な世界を見ておくべきだ。そうした後に自分のあり方や生き方を決めることができればそれで良いのだろう。今回の留学で考えたことや得たことはとても多く、全てを指定字数内に収めることは困難だと感じている。これからは、台湾の人から沢山いただいた親切な心持を私も常に忘れないようにして生きていきたい。(2423 字)



花蓮市内の夜景

「台湾留学を終えて」 教育学部学校教育課程 1 年 河合 佐紀

私は、今回の研修が人生初めての海外な上に、一人暮らしが未経験であり、日本の佐賀以外の生活を知らなかった。正直、不安しかたない状態で始まった 1 か月。しかし、多くの人に助けられ、異文化に触れ、自分を見つめ直す機会となり、かけがえのないものとなった。私がこのプログラムに参加しようと思った理由は、大きく 2 つある。1 つは、1 年生の春に自分で決めたことを最後までやり遂げたいと思ったことだ。あつという間に時が、流れていく中で何か将来につながることをしたいと思った。もう一つは、私は、自分の専門とは別に英語の教員免許を取得したいと考えており、英語力を上げたいと思ったからだ。東華大学では、英語での授業が提供されていた。また、異文化を実際に自分の目で見て、感じる事が、将来教員になったとき大きく役立つと考え、迷わずこのプログラムに応募した。

私はこの 1 か月で特に、3 つのことを学んだ。1 つ目は、自分の意思・意見の伝え方だ。バディの子と旅行に行ったときに、バス内が混んでいて降りることができずにいた。すると、バディの子が大きな声で運転手に知らせていた。また、旅行の帰り際に「また、ご飯でも行こうね」と言うと、すぐに「いついく？」と言ってくれた。日本人の場合、別れの挨拶と捉えがちであり、文化の違いを感じた。台湾では、どうしたいのか、何が食べたいのかははっきりした意見が求められることが多くあったように思う。私は、あまり自分の意見をはっきり言うのが得意ではない。だから、台湾での授業内でのグループによる話し合いの時間がとても怖かった。日本語ですら緊張するのに、ましてや英語なんてと思っていた。しかし、どの留学生も真剣に私の話を聞いてくれた。みんなが、それぞれに考えていることを真剣に話す中で、意見を言うことに恥ずかしいと感じている自分が恥ずかしいと感じるようになった。そして、話を深めることの面白さを学んだ。日本でもこれは継続していきたいと強く思う。

2 つ目は、環境についてだ。台湾はとても環境に良い国だ。コンビニやスーパーでは、日本では、当たり前のようにもらっている箸、買い物袋やお手拭きなどお金がかかる。自然とエコバックを買い物の際は持参するようになった。また、寮でのごみ捨ては、とても細かく分別しなければならず、リサイクルも徹底されている。最初は、ごみ収集の方がなかなかごみを受け取ってくれず、大変だった。私の環境に対する意識の低さを痛感した。私は、都会である高雄、台北に出かけた。空は、曇っていて多くのバイクが行きかかっていて、空気が汚かった。バディの子もすぐにマスクを着けて対応していた。一方で、東華大学がある花蓮、太魯閣、宜蘭では、とてもきれいな大自然を見ることができた。太魯閣という場所では、鍾乳洞に入り、地層や崖と大自然を目の当たりにした。宜蘭では、自然の温泉地に連れて行っていただき、川の水で野菜を洗い、自然の熱で火を通して食べた。とても環境がきれいではないとできない体験だった。台湾で、二つの面を見て感じる事ができたことは、とてもいい経験となった。私は、日本でも分別、リサイクル、エコバックやマイボトルを持ち運び環境に配慮したい。そして、私からみんなに発信できるくらいになりたい。自分の環境に対する意識の低さと環境について考えることができた。

3 つ目は、臨機応変に対応することの大切さだ。予定通りに

いかないときや何かハプニングがあったときにいかに冷静に入れるか、また、それに合わせて考えて、行動することができるかが何よりも大切だと思った。まず、1 日目に寮の環境が日本と違い、とまどい、とても焦った。しかし、部屋のメンバーで話し合い、切り返してすぐに自分たちが生活しやすい環境に変え、ストレスが少しでもなくなるように工夫することができた。他にも、バディの子と旅行した時、台北でロッカーに荷物を取りに行く人とご飯を買いに行く人と別れて行動した時にはぐれてしまった。この時に1番感じたことが冷静でいることだ。言語も違い、文化も違うのだから混乱してしまうのは、当たり前だ。しかし、ここでいかに冷静で対応できるかが、解決のために大切なことだと身をもって感じた。その後、無事に合流し、今では笑い話としてバディの子との良い思い出だ。

私は、大きくこの3つのことを学んだ。私は、この1か月で学んだことをさらに学びを深め、継続したいと強く思う。大きく自分で変わったなと感じるのは、何においても積極的になったように感じる。授業の席でも普段なら知っている友達の隣に座ろうとするのだが、台湾での3週目あたりから、なるべくさまざまな国の人と話したくなり、なるべく日本人とは隣にならないように心掛けた。自分から話しかけてできた韓国の友達とは、今でも連絡を取り合っている。また、私の専攻していた先生とは、とても仲良くなり日本に春から来られるそうで、日本を紹介しようと計画している。このように積極的になることで、たくさんの出会いが増え、多くの刺激を受けた。台湾人の勉強に対する積極的な姿勢は、日本人が学ばなければならないことだ。とても勉強に熱心な学生が多く、もっと頑張らなければならないと思わせてくれた。

バディや東華大学の先生などがとても親切にしてくれた。困っているときには、親身になって助けてくれた。そして、日本についてたくさん興味を持ってくれた。自分の国について興味をもって下さるのは、とても嬉しい一方で日本についても知らないことが多いと分かった。実際に留学してみないと分からないことだらけだと思い、とても貴重な経験となった。私は、学んだことを継続する一歩として留学生チューターにチャレンジする。楽しみながら、多くのことを吸収していこうと思う。



週末に訪れた九份での1枚

「東華大学で得られたもの」 経済学部経済法科 1年 合力 結香

今回、SUSAPspring2019 台湾・東華大学プログラムに参加するにあたって、まず、一ヶ月が過ぎるスピードの速さに驚きました。しかしこのことは、それだけこの一ヶ月が充実していたと言い換えることができます。間違いなく人生の中で最も濃密で時間を過ごし、貴重な体験をすることができたと思います。これほどまでにこの台湾での一ヶ月が刺激的であったことには、二つの要因があったと考えます。

一つ目は、まず何よりも、現地の学生が英語に堪能であったことが挙げられると思います。英語圏に行ったことがありませんので、どの程度話せて、どの程度読み書きができれば英語に堪能であるといえるのかはわかりませんが、日常生活から垣間見える彼らの英語力はかなりあったと思います。台湾にいくと決まったものの台湾語は全く分からなかったもので、正直に言うと、現地の学生とのコミュニケーションは不安なところがありました。しかし彼らは私立か公立かの違いはあるものの、幼稚園や、遅くとも小学生のうちから英語を学び始めており、大学生ともなるとかなり話せることが多かったです。これは私にとって予想外の出来事でした。そのため、現地の学生と話すときはむしろ我々日本人の拙い英語を彼らが読み取るというような状況で、言いたいことをすぐに表現できないもどかしさを何度も何度も経験しました。伝わらないもどかしさや悔しさ、情けなさも、今となっては私の英語力を向上させるにはすべて必要なステップであったと確信しておりますし、英語で受ける授業や現地の学生との会話を通して、リスニング力、スピーキング能力、リーディング能力、ライティング能力すべてが一ヶ月よりも上昇したと確信しております。それほどまでに英語を毎日使う日々でした。英語の授業を例に挙げると、佐賀大学は週に一回だけですが、台湾の東華大学は、Oral Training, Writing and Listening など技能に分かれて細分化されていて、英語に触れる機会が多かったです。また、東華大学は留学生の数も多く、台湾人だけでなく、いろいろな国籍の留学生と知り合うことができ、それもたくさんの英語を話すことができた一つの要因だったと思います。台湾に行くまでは、英語を話すためには英語圏に行かなければならないと信じ込んでいましたが、それは間違いであったということを学びました。この背後にはやはり日本と台湾の英語教育の違いがあることには間違いありませんが、例えば日本のように、公用語が英語ではない国は英語を話すことは難しいと、恥ずかしながら気付かないうちに思い込んでいたように思います。

二つ目に、台湾の大学での授業が非常に活発であるということが挙げられると思います。4週間ある最初の週はただひたすら学生の発言の多さ、居眠りやスマホを触るといったことの少なさに驚いていましたが、2週目からは現地の学生に負けまいと自分も発言をするように心がけました。慣れない中英語で授業内容をまとめながら自分の意見を全員が聞いている中で発言するというのは、今までになく緊張しましたが、本

当にいい経験でした。また、私が一番印象に残っている授業は、経済学部系の学部の専門の授業で、「International Business Management」という授業です。その授業では常に発言が求められるうえ、班に割り振られて、特定のテーマに沿って30分間のプレゼンテーションをしなければなりません。残念ながら一ヶ月間という期間の関係で、私はそのプレゼンテーションに参加できませんでした。パワーポイントのスライドを作る過程に参加し、私のパートの発表を事前にとって、当日に流してくれることになりました。そのプレゼンテーションを作るときに何度かミーティングをしたのですが、その時の時間はいまでも鮮明に思い出すことができます。ミーティングをした学習室のようなところでは数多くの学生が同じようにパソコンを前に真剣に語り合っていて、日本ではあまり見かけない光景でした。夜の8時や9時頃からそのミーティングを始めて、学習室が閉まる12時までがあったという間に感じるほど、充実した時間であったといえます。チームのメンバー4人は台湾人、日本人、モンゴル人、インドネシア人と出身は全員違いましたが、皆フレンドリーで、専門的な課題について議論できたり、わからないところをお互いに教えあえたりしたことは非常にいい経験であったと感じるとともに、現地の学生や先生が1ヶ月でいなくなる私にも対等に扱ってくれたことが本当に嬉しかったです。帰国後、私の発表についてのフィードバックを同じ授業の学生がSNSを通じて教えてくれたのですが、スライドの内容や帰国した後もレコーディングで参加する姿勢などを評価していただき、非常に自信になりましたし、パワーポイントを作成した時間がすべて報われたように感じました。

この東華大学プログラムは現地の授業を現地の学生と同じように受けられることが最大の魅力であり、このように刺激的な授業を一ヶ月間も受け続けることができたのは本当にいい経験でしたし、一ヶ月ではある種の物足りなさを感じました。一ヶ月でこれだけのものが得られる台湾でもっと長く留学することができたら、どれだけ成長できるのだろう、と底知れなさを感じました。総じて、この一ヶ月で得られたものは計り知れないですし、本当に東華大学で一か月を過ごしたことがこれからの私の人生において大いに役立つであろうことは言うまでもありません。このプログラムに参加できて本当に良かったと思います。(2219字)



“International Business Management” で知り合った学生と

「自分次第で世界は変わる」 農学部応用生物科学科 1年 坂本 佳穂

私がこのプログラムに参加した目的は語学能力の向上と自分の価値観を広げるためである。小学生の時から英語を学習してきたが、国内にいると日本語だけで十分足りてしまうので、実際に生きた英語に触れる機会はほとんどなかった。そのため、日本語の通じない環境下に自ら身を置くことで英語を積極的に使える機会を増やそうと考えた。また将来、研究室や企業に配属された際に、国内だけでなく世界のニーズにも応えられるような人材になるため、海外を経験することで日本との文化・慣習の違いを肌で感じたいと考えたため留学をしようと決心した。

私たちは花蓮にある東華大学という台湾内で第2位の敷地面積を持つ広大な国立大学で、週に20時間程度の授業を現地の学生とともに受けた。私には2人のバディがついていて、観光業に興味があり日本での留学経験のあるバディに、台湾の各地で毎日開催されている夜市につれていってもらい美味しい食べ物と一緒に食べたり、天文部に所属しているバディと自然が美しい大学周辺で月や星を眺めたりした。2人とも初めての留学で不安を抱えている私に対してとても親切にしてくれ、拙い英語で話す私の言っていることを理解しようと時間をかけて話を聞いてくれた。また、2人とも日本にとっても興味を持っていて日本のアニメやドラマについて日本人の私よりも詳しく知っていて驚いた。

また、私たちに親切にしてくださるのはバディだけではない。同じ授業を受ける大学生や先生、お店の店員さん、道端であった見ず知らずの人まで他人であるはずの私たちに対してまるで昔からの友人のように接してくださる人が多い。例えば、台湾スイーツである豆花のお店の店員のおじさんはとても日本語が話せて、読めないメニューの解説をしてくださったり、観光で行った日本の各地について教えてくださったりとてもフレンドリーに接してくださった。

平日は自分の興味のある授業を受けた。特に私の印象に残っているのは、「Tribal Tourism English」という授業で、英語で開講されていた。その授業では台湾の原住民について学んだ。しかし、先生や生徒はすべて英語を用いながら授業が進んでいくため、初めは話についていくのに必死であった。さらにその授業で台湾の原住民についてのプレゼンをするようになった。台湾には正式に認定されているだけでも16もの民族が存在する。そのうちの「セデック族(賽德克族)」についてペアとともに調べた。私は台湾の原住民についての知識はほとんどゼロであったのに対し、現地の学生は小学生のときに詳しく学習したらしく、すべての原住民の名前をすらすらと言っていた。私も少しでも追いつけるようインターネットや台湾の原住民が主人公である映画を観たりして学習した。調べれば調べるほど私は心が揺さぶられる思いを感じた。なぜなら、台湾が日本に統治されていた時代に多くの原住民が日本人に殺害されたり、文化・慣習を無視した生活を強いられていたということを知ったからだ。このことは、台湾の歴史の授業では習うらしいが、日本では聞いた覚えがない。原爆が落とされたなど被害にあったことばかりを日本で教えられてきたので、自分には断片的な視点しか知らないということに留学して気が付いた。そして、今

「SUSAP 台湾プログラムを通して」 教育学部 1年 相良 凜

まで私は授業をただ受動的に受けているだけだということにも気が付いた。世界を多面的に広く知るためにはもっと自分から学習しなければならないと感じた。それと同時に、あることを疑問に思った。なぜ台湾の方は日本人に対して親切に接してくれるのだろう。私ならそのような待遇をしてきた人たちに対してそこまで親切にできる自信がない。そこで、私とプレゼンをともにする偶然ペアになった本物の原住民の子に日本人として過去にそんな酷い待遇をしたことについてとても悲しく、申し訳ない思いを伝えるととともになぜそこまで日本人に対して親切にしてくださるのかを尋ねた。すると、彼女は「それは過去のことだから、今の日本人が申し訳ないという感情を抱くのは間違っている。私たちは、今、日本の文化も日本人も大好きなので過去の歴史のことで恨んだりしていない。」という答えが返ってきた。もちろん、日本人に対して今も快く思っていない台湾の方はゼロではない。しかし、多くの台湾の方が持つ、過去のことで人を決めつけず、今の私たちを見つめてくれる精神に本当に感動し、その心構えを私も持ちたいと思った。

この留学を通して、日本にいただけでは感じることでできなかったことを身をもって知ることができた。まず、自分はまだ世界のほんの片隅しか知らない人間だということに気が付いた。プレゼンのために調べた原住民の歴史や現地の友人と話して知ったことなど学べば学ぶほど自分の知識の浅さを認識した。また、現地の授業ではクラスみんなが考えたことを次々と発言して先生との会話が生まれ活気があり、受けていて退屈な時間がなかった。教員の自己完結の授業でなく能動的に生徒も参加するため、常に頭を働かせている必要がある。このような現地の学生たちの学びの姿勢を見て、積極的に学習することの大切さを知った。さらに、1ヶ月英語で授業を受け、このように英語を積極的に使う機会があったこともあり以前よりもリスニング力やスピーキング力が伸びたと感じた。そして、留学初期に比べて初めてのことに挑戦するハードルがかなり下がったと感じた。台湾に行きほとんどすべてのことが初めての体験であったので、毎日勇気を奮うことが多かった。日本でもこの状態を保ち、初めてのことを恐れずに自分の力を伸ばす経験に積極的に挑戦したいと考えている。

最後に、もしこれを読んでいる人で留学に迷っている人がいれば留学は必ず自分にプラスになる経験だと思うので、時間と体力に余裕がある大学生のうちに是非行ってほしい。自分次第で世界は変えられるのだ。



台湾の原住民（東華大学の生徒による）

私が今回このプログラムに参加した理由は2つあります。まず1つ目は、自分の英語力がどれくらい伸びているのかを実際に海外に行って確かめたかったからです。私は高校2年生の時にカナダへ短期留学をしました。その時は初めて海外に行ったということもあり、英語が話されるスピードについていけず毎日苦戦していました。それから、2年半以上経ちますが、自分の英語のスキルがどれくらい成長しているのかを自分の肌で感じようと思いました。2つ目は、1ヶ月間自分が経験したことがない環境で生活する力を身に付けたいと思ったからです。海外に行くことで、自分ができないことや知らないことに直面し、悩んだり苦しんだりすることがあると思います。しかし、このような状況になった時でも逃げずに自分で解決する力を身に付けたいと思いました。この2つの理由から私は今回このプログラムに参加させていただきました。

実際、台湾に行って1ヶ月過ごす中で台湾式の神社でお参りをしたり、有名な観光地に行ったり、パディの家でお世話になったりと沢山の異文化体験をすることができました。これは普段日本ではできないことなのでとても新鮮で、感動しました。その経験も含め、このプログラムを通して特に学んだことが3つあります。まず1つ目は、1日1日目標を持って生活することです。最初は台湾の環境が合わない上に、自分の英語力の不甲斐なさを感じて1ヶ月しっかりと生活できるのかとても不安でした。しかし、ここでとても活用的だったのが1週間に1回書くリフレクションと自主的に書いていた毎日の日記です。リフレクションでは、その週の目標や予定、それを達成するため意識したことや活動したことか書けるようになっていたため自分の短期的な目標を立てやすかったです。また、自分が書いたリフレクションについてピアの仲間からアドバイスや感想をもらえるのは、自分だけでは気づけなかったことを知ることができ、さらに目標を立てやすくなりました。毎日書いていた日記では、目標はもちろんですが、その日の行動を細かく書いていたため、自分の行動を振り返りながら、次の日の目標やすべきことが沢山出てきて、毎日をととても充実して過ごせるようになりました。日本にいる時では、長期的な目標は立てがちですが、このような毎日や週ごとの目標を立てて生活することはなかなかないので、自分を見つめ直すとても良い機会となりました。2つ目は、台湾についてはもちろん自国の日本についての知識もしっかり持つておくことの大切さです。今回台湾に行くのが初めてだった私は、台湾の歴史や、文化、習慣などの知識を全然知りませんでした。しかし、事前研修で短時間ですが台湾のことを学ぶ時間を設けて頂いたため、現地でもとても役に立ちました。それはパディとコミュニケーションを取る中で、中国と台湾の関係の話をした時でした。なぜ台湾は自分達の国旗や政府、言語をもっているのに中国の一部とされるのかが納得されてないようでした。この話をするときのパディの様子はいつもよりも強い言葉で話していて、本当に難し

い社会問題なのだと実際に自分で感じました。事前研修でもこの問題について触れ、現状を教えて下さっていたので、バディが言っていることが理解しやすく、しっかり話し合うことができました。この経験から、やはり海外に行く前はその国の社会問題まで深く勉強しておくべきだと思いました。また、自国の日本についての知識を知っておくこともとても大切だと思います。特に台湾は親日国だと言われていることもあり、日本について沢山の疑問をもたれていました。私が1番戸惑った質問が、将来に役立ちそうだと思う、受けていた Workplace English という授業の中でありました。その授業では、様々な職業の初任給について聞かれる場面がありました。確かに英語で伝えることは難しいですが、その前に日本の職業の初任給についてそこまで詳しく考えたことがなかったので、知識不足で伝えることができませんでした。先生から「恥ずかしがらないで！」と言われ、伝えたくても伝えられない悔しさを感じました。こんな状況に直面した時に、知識をしっかりもっていたらすぐに対応できたのではないかと考えました。さらに、日本についての知識を増やしておくことで沢山の人とコミュニケーションを取る機会が増え、親しくなりやすいと思いました。やはり、他国の知識を学ぶ前に自国について深く詳しく知っておくことが大切だと考えました。3つ目は、自ら積極的に行動することです。私は正直、自分から何でも挑戦する勇気がなく、決意するのにとても長く時間がかかってしまっていました。しかし、台湾に行ってから自分判断して行動することが多く、新しい発見を沢山することができました。例えば、私にはバディが2人いてくれたのですが、その2人もお互い初めて出逢い、3人とも初対面からスタートしました。最初はなかなか会話も弾まず、緊張した状況が続いていたのでその日の夜にご飯と一緒に食べに行こうと誘いました。そうしたことで、だんだん慣れてきて良いコミュニケーションが取れるようになりました。それからはお互いご飯や遊びに誘い合うようになり、最初の日に勇気を出してご飯に誘ってみて本当に良かったと思いました。また、私は佐賀大学では教育幼小発達専攻として学んでいますが、運動することが大好きなので東華大学の方では日本では専攻とすることができない教育学部の体育専攻を選択しました。この専攻にしたことで、驚くほど親切で日本語も話すことができる先生に出会いました。その先生は私をご飯に連れて行って下さったり、花蓮の有名な観光地を案内して下さいたりと先生のお陰で充実した生活を送ることができました。さらに、先生は自分の教え子を何人も紹介して下さいたため、沢山の先輩や友達をつくることができました。特に先輩達は親切でいつも私のことを気にかけて下さり、ご飯や遊びに一緒に行くことで英語の勉強にもなり、しっかりとした異文化交流をすることができたと思います。その中には日本のことを好きな先輩もいて、お互いに日本と台湾について紹介し合い、さらに深く台湾を知る良い機会となりました。勇気を出して日本ではできない専攻にしたことでたくさんの人と出会い、新しい経験を積むことができたので、自分で判断し積極的に行動して正解だったと思います。

このように、今回このプログラムを通して日本では学べないような事をたくさん学び、また新しい発見をすることができました。台湾で出会った先生や先輩、友達との関係を大事にしながら、これからも交流をしたいと思います。海外に知り合いを持ち、連絡を取り合う関係を保つことで、英語の勉強になることはもちろん、将来自分の武器になると考えます。さらに、私は今回の短期留学を生かして長期留学にも挑戦したいと考えているので、台湾で感じた海外の方の英語力から受けた刺激を忘れず、英語の学力向上に励みたいと思います。



花蓮市の台湾スポットでパシャリ！

「留学で得たもの」 農学部生命機能科学科 1年 副島 史津華

私は SUSAP2019SPRING 台湾東華大学プログラムに参加して、普段とは異なる環境下で学習や生活することによって今までで最も有意義な1ヶ月間を過ごすことができました。これは1ヶ月の中で数々のことを学び、生活を送る中での気付きが日本で過ごしているときよりもはるかに多く、また沢山の人の関わりの中で自分自身が成長することができたからであると考えています。ここでは実際に台湾に滞在したからこそ気付くことができたこと、それについての考察について述べます。

まず、教育方針についてです。日本の大学とは異なり、東華大学ではどんな授業においても、一人一人の発言が求められ、その教室にいる生徒たち自身が授業をつくりあげている印象を受けました。もちろん日本の大学でもアクティブラーニングというような学習方法が取り入れられ生徒が発言することが全くないことはないのですが、台湾ではそもそも「生徒が授業を積極的に受ける」ということを意識せずとも生徒が主体的に学んでいくことが当たり前になっていて、日本での受け身な授業スタイルは海外に比べて遅れをとっていることを実感しました。私は日本でただ座って教授の授業を聞くというような受動的な授業の受け方しかしてこなかったので、今回の留学では授業に対する取り組み方を見つめ直す良い機会になりました。また、その他にも台湾の授業は一人一人の意見がより授業に反映されやすいようにするため、一つ

の授業を受けることのできる人数が多くても五十人前後しかいませんでした。これは生徒の発言が重視されているからこそ、このようになったのではないかと思います。このようなことも含め台湾の教育方針は日本でも学生のためになると思ったので、取り入れられるべきだと私は思いました。

次に、環境問題に対する取り組み方についてです。台湾では買い物に行ったときにスーパーやコンビニなどに限らず、どの店でもレジ袋や割り箸はほとんどもらえることがありませんでした。また、ごみを捨てるときにパディの人や他の台湾の人たちはどこへ行っても必ず再利用できるものと一般ごみを分けてゴミ出しをするように私たちに注意を促していました。私は分別をきちんとすることやレジ袋をなくすことを徹底していることなどから日本人よりもはるかに台湾の人の環境への意識が高いのではないかと思います。日本で生活していたときはレジ袋をもらえるのは当たり前だと思っていましたが、自分が当たり前だと思っていることが通用しないことと、日常生活を送るなかで自分にはこれらのことに対する認識があまりないことに気がきました。これは私だけでなくほかの日本人もそうであると思います。日本ではテレビやニュースなどで地球温暖化などの環境問題が多く取り上げられ、ほとんどの人が私たち人間が環境を破壊しつつあることも知っているにもかかわらず、私たち日本人は未だに環境改善につながる行動を地域や国をあげて行うことができていません。日本はこのような点においても海外よりも遅れをとっていると思いました。このことについて考えるようになってから、私は生活の節々で環境のために節約できることがないか、無駄遣いしていないかを意識しながら過ごすようになりました。そして、この環境に対する意識を日本の人が変えるためにも台湾の取り組みを広めたいと思いました。

以上のことから私は物事について深く考え、自分自身を見つめなおし、視野を広げていくことができました。それと同時にこれからの自分の課題も見つけることもできました。これらのことはこのプログラムに参加しなければ自分で気付くことができなかったことばかりだと思います。よく海外へ行った人の話で耳にする、「一度日本からでることで見えてくることがある」ということを自分の身をもって体感し、良い刺激を受けることができました。

今回の留学において、私は自分の語学力に自信をもつことができるぐらい現地の人と積極的に交流することを一番の目標としてあげていました。この目標に関して、私は語学の面では台湾へ来る前とくらべて格段に英語力をあげて自信をつけることができましたと思っています。最初は聞き取ってリアクションをとることくらいで精一杯でしたが、現地のパディや授業で出会った人が親身になってアドバイスをくれたり、沢山の話題について話し合うことが何度もできたおかげで、帰国するときには相手の話している内容を理解してスムーズに反応し上手く会話のキャッチボールをすることができるまでになりました。日本で毎日英語の実践的な練習をするというのは難しいため、台湾では朝から夜までずっと英語に触れるという貴重な体験をすることができました。今回伸ばすことができた語学力をこれからも引き続き伸ばしていくためにこれからも語学勉強を怠らず、さらに、英語で日常会話を話すというところからもう一步先へ踏み込んで、「フォーマルな

場所できちんとした英語を話せるようになる」という新たな目標を留学をみつけたので、語学力向上のために努力していきたいと思います。

最後に私は今回の留学で、初めて自ら海外へ行き、言語学習をしたり沢山のひととの交流で文化や歴史、社会問題など多くのことを学びました。私はこれでようやく国際社会や異文化を理解するためのスタート地点に立つことができたと思っています。この留学で満足することなく、今回学んだことをこれから活かしてより多くのことを吸収していきたいです。そして、再び留学するチャンスがあれば挑戦したいと思います。

今回留学する機会を与えてくださった国際課の方々、この留学に関わってくくださった人に本当に感謝しています。この留学で大いに自分を成長させることができました。本当にありがとうございました。(2342字)



English communicationでお世話になった先生と

「初めての海外留学」 教育学部小中連携コース初等教育主免英語科 1年 中尾 水紀

初めに、私は東華大学プログラムに参加して、台湾のイメージが変わった。留学に行く前のイメージは衛生面があまりよくない、暑い、日本よりも教育、産業、農業などの面で社会的に遅れている、親日であるというものであった。しかし留学を終えた今のイメージは少し変わった。私がこのプログラムに参加しようと思ったきっかけは主に三つある。一つ目は、異文化を理解したいと思ったからだ。二つ目は、公用語が日本語ではない環境に行き自分の英語の実力を試したいと思ったからだ。三つめは、春休みを充実させたいと思ったからだ。これらの理由から東華大学プログラムに参加した。そして実際に現地の人と交流したり同じように授業を受けたりするうちにもっと深く知りたいと思うことがたくさんあった。そのなかでも特に興味をもった英語力の違いについて日本と比較しながら述べたいと思う。

私が台湾に留学して一番日本とは違うと感じたことは台湾の学生たちは自分が思っていたよりも英語を話せる人が多いということだ。日本では幼いころに海外に住んでいた、長期留学をしたことがあるという人以外はスラスラ英語が話せるというレベルまで話せる人はあまりいないと感じるが、台湾では

半分くらいの生徒がネイティブの先生と対等に話せるくらいまでのレベルの英語力があつた。そのためネイティブの先生によって英語で行われている授業は、日本だとすごくスローペースになったり、簡単なことしかやらなかったり、ついていけない生徒が多くいたりするのに、台湾だと先生も手加減なしの速さで進め、英語での発表やプレゼンをやるような授業が多くあつた。このようなことから台湾の教育は日本より遅れているという勝手なイメージを持っていた自分を恥ずかしく思った。同時に、なぜ台湾の学生たちはこんなにも英語が話せるのだろうと台湾の教育についても興味をもつようになった。そこから、台湾の学生たちと英語とのつながりについて見聞きすると、まず一つ目に台湾の学生はほとんどみんなイングリッシュネームを持っているということ。みんな生まれたときに親が中国語の名前と同様につけてくれたそう。イングリッシュネームと英語のつながりについて自分なりに考えると、中国語での名前はほかの地域よりも発音しづらく英語の授業を受けるときに外国の先生にとってはイングリッシュネームがあるほうが呼びやすいからということ、イングリッシュネームがあることによって英語をより身近に感じるができるということだ。二つ目に英語教育の始まりが早いということ。裕福な家庭とそうでない家庭で差はあつたものの日本よりは早い段階で教育が始められていた。裕福な家庭では幼稚園からアルファベットを習い始めており、そうでない家庭でも小学生になるとすぐに英語教育が始められるそう。三つ目にスピーキング能力、リスニング能力に優れているということだ。台湾の学生たちは英語を話すことを恐れておらず積極的に英語を使おうとするし、先生の言っていることにしっかりうなずいていたり、笑ったりしていた。また台湾の学生たちの英語は発音がよく、文章を読むと詰まらずに読んでいたことから日本人との差をはっきりと感じた。しかしライティングの授業を受けると日本人と変わらないくらい力であったことより台湾の英語教育はスピーキングに力を入れているのだとわかつた。

これらの三つのことより、私なりに台湾人と日本人の英語の差について考えた結果、前に述べた教育の違いが大きいと思うが、そのほかにも大きな二つの理由があると考え。一つ目は、母国語の違いだ。日本語はほかの言語と比べて発音記号が少ないため日本語が母国語の人にとって英語は使ったことのない舌の動きや、やったことのない発音をするためより難しく感じる。それに比べて中国語はピンインという発音記号があり日本語よりも圧倒的に多くの発音の仕方があることを知つた。発音記号が多くあるということは英語でも使い慣れた発音が多くあるということにつながると考える。これらより母国語の違いによっても英語の教育の仕方を変えていくべきだと考えた。二つ目は、授業の雰囲気だ。日本の授業は、学生が恥ずかしがって発言しないという光景をよく見るが、台湾では間違つてもそれを恥ずかしがるようなことはなく発言しやすい雰囲気があつた。また私が受けた原住民民俗学部の授業では色んな部族出身の学生がおり、その部族の伝統的な踊りを学生自ら踊ったり服を持ってきたりと学生自らが積極的に授業参加しており、みんながお互いを理解しあおうとする雰囲気を感じることができた。いい意味で何をしてもいいという雰囲気があり、この雰囲気の授業を受けると間違えてもいいから話してみようと思え自然と下手な英語を話すことを怖がらなくなつた。このように雰囲気作りも英語の学習にとって大事なことだと感じた。

最後に、初めて海外で過ごして、もちろん台湾についてのこ

とをたくさん学べたが、一番学んだのは自分についてだ。台湾の人と話していると日本のアニメや観光地、有名なものについての話によくなつたが私がそれらを知らずに話が盛り上がらないということがたくさんあり、自分が日本についてどれだけ無関心だったかということに気付いた。これからの大学生活では専攻している教育についてはもちろんそれ以外の分野も自分には関係ないと思うのではなく広く興味を持つことが必要だと感じた。また、初めて海外に行き、台湾のことについて知っていくうちに台湾以外の国についてもたくさん知りたいと思うようになった。現地に行かないとわからないことが多くあり、海外留学の意味を知ることができた。また台湾で一番興味を持つたのは英語教育や教育についてであり、ほかの国の教育についても実際に自分が同じように授業を受けて自分の目で見て知りたいと思うようになった。そのためには今の自分では英語力が足りないからもっと勉強して教育が発展している国に長期留学をしたいと強く思うようになった。このように今までではっきりしなかつた自分の興味があることや大学生活の中でやりたいことについて知ることができたため今回のプログラムに参加してよかつたと思う。



湖が美しい大学

「台湾で生活して感じたこと」 農学部生物環境科学科 1年 原口 ななみ

2月17日から3月16日の28日間台湾の花蓮市にある東華大学で行われたプログラムに参加しました。このプログラムでは実際に現地の学生たちと一緒に英語で開講されている授業を受けることが出来ました。そのため、長期間の本格的な留学に似た生活を一か月間体験することが出来ました。

このプログラムに参加して、自分の英語の実力のなさを痛感しました。私は英語で話をするという機会がこれまでほとんどなかつたので自分の話す能力がどの程度のものかわかつていませんでした。実際に、自分のバディや授業で隣になった人たちと話さなければならない場面になったときに、最初はほとんど何も話せませんでした。はじめのうちは相手から聞かれたことに単語で返事をするので精一杯でした。それから少しでも話せるようになりたいと思って、あのときどのように表現すればもっと伝わったのか、的確だったのかと思つた単語や言い回しは調べるようにしました。同じような会話をする場面があつた

ときに前よりもうまく伝えられた時はうれしかったです。英語で伝えられないときは自分の表情や動きで伝えました。ボディランゲージに助けられる時が何度もあって、動きを大きくすることや表情をはっきりさせることの大切さを実感しました。

現地の学生と関わっていく中で台湾の学生の英語の能力の高さに驚きました。日本の大学生と比べて流暢に話すことのできる大学生がとても多かったです。理由をいろいろ聞いてみましたが、小学生の低学年のうちから、あるいはもっとはやくて幼稚園のうちから英語の学習をはじめていること、学校とは別に多くの人たちが英会話のスクールに通っていることなどがわかりました。また、大学の授業でも日本の授業との違いがたくさんありました。日本の大学では生徒の発言する場面がほとんどない授業が多いですが、東華大学で受けた授業では生徒と先生が一緒になって進める授業や、生徒主体で進める授業が多かったです。そのため常に授業のトピックについて考えておく必要がありました。集中して授業を受けなければならないので大変でしたがとても身になりました。このような点から日本は英語の学習体制や授業方法などにおいて劣っている部分があるように思いました。日本では読み書きがある程度できる人は多いですが、聞いたり話したりすることが出来る人は少ないと思います。しかし、実際にコミュニケーションするときに主に必要になってくるのは聞いたり話したりする能力です。海外の人たちと交流するのが当たり前になっている今、このままでは日本はまずいと思いました。私も英語に触れる機会を持ち続けて英語の能力を磨いていきたいです。

英語をより学習する必要があると感じた一方で、日本についての知識不足も感じました。台湾と日本の違いの話をしているときなどに、どうして日本はこうなの？と聞かれることが何度かありました。日本で生活しているときには当たり前すぎてどうして、などと考えたこともなかったことについて答えるのは難しかったです。また、日本に興味を持っている台湾の人たちの中には日本人の私よりも日本のことについて詳しいことがあったりもしました。そういったときに自分は日本のことについて知らないことがたくさんあるのだなと思いました。海外に目を向けることも大切ですが、自分が日本人である以上海外の人たちに日本の良い所をアピールできるくらい日本のことについて知っておく必要があると思いました。加えて、日本と台湾との関係について日本では日本史でも世界史でもほとんど触れられることはないですが、台湾ではみんなが知っているような事実がありました。日本が台湾にしてきたことは、日本人として知っておく必要があると思います。

次に私が台湾で面白いと思った点は、台湾ではいろいろな国の文化が取り入れられているところです。日本や韓国のテレビ番組が放送されていたり、商品がたくさん売られていたりしました。こういったところから日本に興味をもってもらえることもあるのだと思いました。日本食のお店も多くみられました。

最後に私が台湾で一番好きだったのは、台湾の人たちの優しさです。大学の中でも、市内に行ったときなどでも私に関わった台湾の人たちは皆さん本当にフレンドリーで親切でした。私のバディも自分の時間を割いて私が不自由ないようにあらゆる場面で助けてくれて感謝してもしきれないくらいでした。

色々なところに連れて行ってもらったり、ご飯を食べに行ったりしました。これは台湾の人たちのおもてなしをするのが好きな国民性からくるものだそうです。台湾に滞在した一か月間、この優しさを毎日感じて、とても支えられました。相手に見返りを求めない優しさは本当に素敵だと思いました。もしも私が海外から来た人たちと日本で関わる機会があったら、台湾の人たちが私にしてくれたように日本でいい気持ちで生活していけるようなかわり方をしたいです。

今回私は二回目の SUSAP のプログラムの参加でしたが、東華大学プログラムでは、現地の学生たちとたくさん関わってより有意義な経験をすることができました。また、実際に授業に参加することで長期の留学をする際のイメージが付きました。このプログラムに参加する以前は台湾のことについての知識はほとんどありませんでしたが、実際に一か月生活することで少しは台湾のことを理解することが出来たのかなと思います。東華大学プログラムを通してできた繋がりを大切にしていきたいです。



↑ 台北で飛ばしたランタン

「台湾の文化と教育」 農学部応用生物科学科 2年 福田 沙和

私は東華大学プログラムに参加して、英語でのコミュニケーション能力の向上だけでなく、台湾の文化や歴史、台湾人の温かさに触れ、台湾という国をより深く知ることができた。言語や文化が異なる環境で一か月間過ごし、慣れない生活で戸惑うこともあったが自分をその環境に適用させていく力も身についた。また、毎日初めての体験ばかりで出会うもの全てが新鮮に感じ、色々な発見をすることができた。中でも私が印象的だった思うことは二つある。

一つ目は、台湾の文化と日本の文化との関係性である。台湾ではスーパーやコンビニなど身近なお店で日本製品が多く見受けられ、街中を歩く際もお店の看板やメニューなどに多くの日本語表記があったり、日本にもある系列店が立ち並んでいた

りした。他にも日本の有名人、人気キャラクターのポスター・製品等、日本に関係しているものが台湾のあらゆる場所で見られる機会が多かった。これらのことから、台湾の文化と日本の文化との間には密接な関係があり、台湾は日本の文化に親しいのではないかと考えた。現に、台湾の大学生と会話する中で、多くの学生が日本のアニメやドラマ、漫画等に興味があり、日本に旅行した経験がある、もしくは日本へ旅行したいという人の割合も高いように感じられた。なぜ、日本のことがそれほど好きなのかと質問したところ、主要な要因として、台湾と日本との歴史的背景が関係しているという答えが多かった。台湾は戦時中、日本の統治下に置かれており、その生活は楽ではなかったが日本政府が台湾のインフラや教育に力を入れた背景があるため、その恩恵もあって日本に対して親しい感情をもつ台湾人が多いそうだ。その他にも、質のいい日本製品、美味しい日本食、日本人の優しさなどが要因であるようだった。私は日本が台湾人にこれほどまで愛されていることに驚いたと同時に、台湾からみた日本がどれだけ恵まれているのかを身をもって感じさせられた。日本にいて普段異文化に触れる機会がないからこそ、もっと色々な国へ行って見聞を広めていきたいと強く思った。

二つ目は、台湾と日本の教育の差である。私は現地学生が受ける台湾での授業を受け、日本の英語の授業との違いを多く見つけた。

まず、台湾の授業は英語の授業といっても、コミュニケーション、リーディング&ライティング、ビジネス英語や英語を使った専門授業といった多種多様な英語の授業が開講されており、ほとんどの授業が英語しか話さない授業であった。日本の場合、英語の授業の種類は少なく、かつ日本語で英語を教える授業がほとんどである。聞いたところによると、その差は台湾の英語教育にあることがわかった。日本では英語を小学校高学年から習い始めるのに対し、台湾では幼稚園の頃から習い始めるそうで、家庭によっては2、3歳から英語を学ぶようだ。また台湾人の多くがイングリッシュネームも持っていることも、英語の授業でイングリッシュネームを呼ぶ必要があるからだそうだ。このように大学の教育システムだけでなく、それよりも前の段階から台湾と日本との間には英語教育に差があると考えられる。そのせいか、東華大学の学生の英語のコミュニケーション能力も平均的に非常に高く、日々自分の英語力の無さを痛感させられた。国際化が進む現代だからこそ、今後英語能力の需要はますます高まるため日本は台湾を見習って英語教育にもっと力を入れるべきだ。

日本と台湾の教育の違いは英語教育だけでなく台湾の授業形式にもあった。具体的には、板書をとらないコミュニケーション重視の授業や、頻繁にあるプレゼンやグループ学習などである。日本でもないわけではないが、台湾ほど重視されていないように感じた。実際に台湾の学生は授業時間外でミーティングをしている風景がよく見受けられ、グループにおける課題でも一人一人が手を抜くことなく取り組んでいるようだった。これらの授業に真剣に取り組み続けたら卒業するまでに社会で必要なプレゼン力や主体性、計画性を身に付けられると感じ、日本でも是非取り入れてほしいと思った。

このように台湾での授業は日本の授業と違って質の良い、バラエティに富んだものが多く開講されているように感じた。私はこうした台湾の教育に感心すると同時に日本の遅れた教育に不安にもなった。台湾から見た日本は経済面や生活面においても憧れのような存在であるかもしれないが今後はその立場が逆転する日が来るかもしれない。だからこそ日本はもっと国外に目を向け、自国の現状を分析しつつ、そういった海外の授業システムを導入するべきであると私は考える。

この一か月の短期留学を通して、私は自分の興味のある分野をとことん追求できたほか、留学当初にくらべてためらいなく英語でのコミュニケーションができるようになった。最初は全く英語でコミュニケーションをとることができず翻訳や日本の友達に頼ってしまうことも多かったが、間違ふことを恐れずに相手に伝えることの重要性を知って、徐々に英語で話すことができるようになった。また、長期留学や国際関係の就職を見据えるうえでもこの留学はとても良い経験になったと考える。毎日新たな発見があったり非日常を体験することはとても自分にとって大きな刺激となり、異文化についてより興味をもったり、色々な考え方や価値観を共有できたりしたのは、自分の経験値を上げることに繋がったはずだ。今後は、新しいことにも挑戦することを恐れずに自分をその環境に適用させていけるようにし、今回の留学のようにそこから多くのことを学べるようになりたい。



バディの方々に東華大学構内を案内してもらう

「広がる世界」 教育学部小中連携コース中等主免専攻英語科 1年 正門 美桜

[はじめに]

私は東華大学プログラムに参加して、留学前に掲げていた英語のスピーキング力の向上という目標を達成することができた。また、留学前は予想していなかった新たな考え方の獲得や視野の広がりを実感する出来事を多く経験することができた。

まず、わたしはこれまで海外を訪れた経験がなかったため空港での入国審査にとっても緊張していた。しかし不安とは裏腹に、スムーズに会話をすることができた。滞在先の住所についての

質問や指紋がうまく検出されないなどのトラブルも英語で説明することができた。この経験によって、留学初日に自分の英語力に対する自信の無さを払拭することができた。

[留学生活について]

留学生活の初めの一週間は、バディとの対面や授業の履修登録、各種手続きに追われていた。これらすべてを英語で行うため知らず知らずのうちに英語力は日々向上していたように思う。しかし、このころはまだ一人で行動する勇気がなく同じプログラムに参加していた日本人の友人たちとまとまって行動してしまっていた。このプログラム期間中に私が毎日書いていた日記には、このころ人に頼りすぎず自分で行動できるようになりたいと書いていた。

留学二週間目は台湾の4連休を利用してバディの Ya-ching と旅行に行った。私はこの旅行が最も私を成長させてくれた出来事だと感じている。まず、私と彼女の共通言語は英語だけであった。お互いに英語が母国語でないため、言いたいことをすべての確に英語で表現することが難しく、何度も翻訳アプリを開いてお互いの主張を理解しようとしたのはもどかしくもあったが、もっと英語を勉強しようと思うようになったきっかけとなった。また、彼女との会話を通して自分の無知さや小ささを知った。とくに、なぜ日本の女性は毎日化粧をするのかという話をしたときは、私が日本人であることを実感するとともに自分の中の当たり前は異文化の視点から見ると奇妙に思えることもあるのだと知り、視野が広がった。また、彼女は小さなころからいろいろな国を訪れていて、様々な文化を知っていた。そしてなにより好奇心が旺盛で、今回の旅行も私が行きたいと行った場所はすべて連れて行ってくれその場所に関する知識も豊富であった。また、この旅行で私は人生で初めてバックパッカーホテルに泊まった。初めは、見ず知らずの人と同じ空間で寝ることや貴重品の管理に対する不安からあまり乗り気ではなかったが、いざ泊ってみるととてもいい経験になった。管理人がとても親切な人で、私が初めての海外でのバックパッカーホテルで緊張していることを知ると簡単な日本語を話してリラックスさせてくれた。また、翌日は伝統的台湾の朝食を作ってくれた。この経験から、固定概念を捨てて挑戦してみると新しい発見があることを実感できた。それを教えてくれた彼女には感謝している。

留学三週間目と四週間目は授業や日常生活にも慣れてきて、授業中に発言することも増え、授業でできた友人とランチに行ったりした。このころにはもう日本人の友人に頼ることはほぼなくなって、一人で友人を誘って自由に過ごす日々が増えていた。台湾人の友人との会話で、日本についてたくさん聞かれた。特に日本の大学生活について興味を持っている人が多かった。台湾の大学が年間1ヶ月しか休暇がないのに対し、日本の大学は4ヶ月もあるということに驚いていた。果たしてどちらがいいのかという議論はとても盛り上がった。最終的には日本の大学の休暇に憧れる友人が圧倒的に多いという結論となった。このころには友人と英語で話すことに全く抵抗やためらいがなく会話を思い切り楽しめるようになっていた。また、日本にいるときは自分の意見を積極的に言えるタイプではなかったが、自分の意見に誰かが新たな意見を言ってくれて会話が広がるのが楽しく、自分の意見をたくさんいうことができた。言語面では、お互いがネイティブスピーカーでないからこそ、多少の文法などの間違いは気にせずに会話を楽しめたことが

良かった。さらに、日本人は英語の発音ですぐに日本人だとわかるけど、あなたは発音が上手だから台湾人かと思ったと言われたときは嬉しかった。しかし、それと同時に日本人は英語ができないというイメージを取り払いたいという気持ちも芽生えた。

[英語教育について]

1か月台湾人と英語で会話してみても一番強く感じたのは、発音力の差である。文法や語彙力は日本と同様に個人差があるように感じたが、発音は皆上手だった。どうしてそんなに発音がきれいなのか友人に訪ねると、中学生くらいからほとんどの台湾人は英会話学校に通うのだという。英会話の授業が始まるのは大学からで、それまでは日本と同じく読み書きやリスニングといった座学ばかりだそうだ。おそらく、これは日本よりも台湾のほうが英語の会話力の習得をより重要視しているということであろう。私は日本でも英会話の重要性を示し、英語教師になった際にはより実用的な英語を身につけられる授業をしていきたいと考えた。今回のプログラムを通して日本の英語教育を客観的にみることで、将来自分がどのような英語教師になりたいのか見えてきたことは大きな収穫であった。

[まとめ]

今回の東華大学プログラムに参加して、私はとても成長することができた。英語力の向上を目標に参加を決めたプログラムであったが、それだけでなく日本がどのような国なのか知ることができた。さらに、自ら行動することが容易にできるようになり、考え方が柔軟になった。また、自分という人間を客観的にみることができるようになったため、人と比べることがなくなり、さらには他人の意見をより尊重できるようになった。この経験を日本での生活で活かしたいと思う。また、佐賀大学で国際交流をしつつ、次回は英語圏に留学し自分の英語力を試したいと強く思う。次回の留学に向け、英語力のさらなる向上と日本についての知識の習得を目標に日々を過ごしていきたい。



迪化街で Ya-ching と台湾の伝統的な制服と正装を試着

「初めての海外」

教育学部 学校教育小中連携コース
初等教育主免理科専攻 1年 宮崎 莉緒

私は東華大学プログラムに参加して、新しい発見や出会いがたくさんあった。この一か月で学んだこと、考えたこと、感じたことを述べようと思う。

●授業について

私は留学前、TOEIC の勉強以外で英語に触れることが少なかった。そのため台湾に行ったすぐは英語も中国語も聞き取れない状況だったので、これから一か月間乗り越えられるのかという不安が大きかった。最初の一週間はどの授業もオリエンテーションだったので、内容に入ることはなかった。しかし、私が履修している授業はネイティブの先生がほとんどだったため、オリエンテーションとは言えども流暢な英語を聞くことができ、私の中では英語のリスニング演習ができた。二週目からは本格的に授業に入り、その中でも私が一番印象に残っている授業は communication level3 の授業だ。この授業では、学生が能動的に授業に参加することを目的としていて、先生の話は殆どなく、授業の最初には必ず周りの人とあるテーマについて英語で会話をする時間が設けられている。初対面の人と英語で話すのは最初は緊張していたが、授業をこなすごとにどんどん楽しくなっていく。相手に伝わりやすくするにはどうしたらいいかと考えるようになり、自分の英語力だけでは伝えきれないときは身振り手振りを加えたり、相手の目を見て話すようにしたり、活動の中で工夫できるようになっていった。活動の一つに寸劇があり、三人一組でテーマに沿った一分間の劇を作るという活動をした。劇を作るのも英語で話し合いながら作らなければならないので、慣れるまでは大変だった。しかし、その授業の先生はいつも「You don't have to collect English. Relax!」と、口癖のように言っており、その言葉を聞くたびに完璧な英語で話そうとして考え込む前に、間違ってもいいから積極的に話す練習をすることが大切なことなのだと感じる事ができ、拙い英語力でも話してみようと思うようになった。このように、東華大学の授業はアクティブラーニングを取り入れている授業が多く、学生の発言する機会がたくさんあった。グループワークで多くの台湾人や他国の人と意見の交換ができ、相手の意見を受け入れつつ自分の意見も相手に伝えていくことが大切で、どちらかが欠けてしまうと会話が成り立たない。様々な考えや意見を聞くことができ、私にとってとてもいい経験になった。

もう一つ、私が面白いと思った授業は日本語の授業である。私たちからすると簡単な文法や、発音を学習していくような内容だったが、日本語を英語で説明することの難しさを実感した。例えば、納得した時に使う「なるほど」と「そうですか」の違いや、時間の数え方で「分（ふん）」と「分（ぶん）」の違いなどを聞かれた。普段私たちが何気なく使い分けている言葉が、日本語を学んでいる方からすると難しいと感じるようだった。何気なく使いこなしていた言葉について聞かれると自分自身どういう使い分けをしているのか、その使い方は正しいのかなどについて改めて考えることができ、私の勉強にもなった。

●台湾について

私は台湾に留学をして、日本とは違う文化や台湾人の人柄など、一か月間で多くのことを知ることができた。些細なことでも日本と違う部分があると驚いたし、面白いと感じた。土地的な面では、台湾の気候は雨が多く傘をさすことがあったが、大学が広いということもあり雨が降っても学生はみんな片手に傘を持って自転車で大学内を行き来していた。私はそれにさえも驚いた。また、台湾は自動車よりもバイクの方が多く、大学前の通りにはたくさんのバイクが止まっていた。そして運転が荒いという印象を受けた。

台湾人については、日本人に対してとても親切してくれた。話しかけてくれたり、私が話しかけると日本のことについて聞いてくれたこともあった。その時感じたことは、台湾人は日本についての知識があるということ、逆に私は台湾について知識が乏しいということだ。台湾人は日本に興味がある人が多く、日本語が話せる人や読み書きができる人もいた。なぜそんなに日本語が話せたり、読み書きができるのかを尋ねてみると、ほとんどの人が日本のアニメやドラマ、音楽が好きで、独学で日本語を勉強しているといった。好きなことや興味があることを続けることはここまで能力を上げることができるのかと驚かされながらも自分もそんな風に夢中になれるものを見つけようと思った。一方で、私は台湾についての知識が少なく、周りの学生と話するときも日本のことについては話が広がりやすいが、台湾のことになると初めて知ることが多く、話が続かないことがあった。もっと台湾についての知識を学んだうえで留学に臨むべきだったと思うと同時に、これからもっと台湾について知ろうと思うきっかけにもなった。

留学中に四年生の女子学生の方とお話しする機会があった際に、台湾は最近男性同士の交際を認めたということを聞き、日本の場合はどうであるかを尋ねられた。私はそこまで詳しく知らなかったため深い話はできなかったが、男性同士の交際についての自分の意見を伝えることができた。このような関りを通して日本と台湾の政治的な違いや、価値観の違いを話すことでお互いに新しい考え方を知り、認め合うことができる。私は日本の学校教育現場で問題視されているジェンダーについて興味があったので、海外との比較をしながら学んでいくことも一つのやり方であると思った。

●おわりに

私にとって、海外に行くことも、留学をすることも初めてであったが、たくさんの方と交流し、バディや大学の先生方、そして一緒に留学した仲間に助けられながら一か月過ごすことができた。休日には日本人だけで台北へ旅行に行った。ホテルの予約やチケットの購入など、すべて自分たちでこなし、授業はもちろん授業以外でも、この一か月で多くのことを経験できた。英語力を上げるために留学をしたが、わたしは人間力も上がったと思っている。これから先、もっと語学力を磨き大学生だからこそでできることに積極的に挑戦していきたい。



1 番印象に残った授業の先生との記念写真